千葉市内野第１遺跡出土の縄文時代晩期の土器群

田中　英世

はじめに

内野第１遺跡は平成８年に調査が完了し報告書も刊行されている（文献１）。その後、報告書に漏れた調査区遺物と調整池出土遺物の報告も行った（文献２）。今回は縄文時代晩期の土器群について報告する。なお、10と162は、図版作成後の追加のため、グリッドが飛んでいるが了承願いたい。（土器の縮尺は破片1/4、器形復元1/5）

１．内野第１遺跡の縄文時代晩期の遺物出土状況

内野第１遺跡の縄文時代晩期の遺構としては、J-20・J-35・J-36・J-42・J-58・J-59・J-98・J-100・J-102・J-106・J-108・J-119・29エリア炉３（C-636）・30エリア炉１～３・33エリア炉４・53エリア炉（C-854）・53エリア炉２（C-782）が挙げられ、これらの出土遺物は報告書に掲載されている。調査区としては、20T-8b、22V-15、22U-5aの出土遺物の一部が掲載されている。22V-15は33エリア炉４と関係があり、安行３bの遺構が存在した可能性がある。新資料は、遺構集中区北側の21U・22U・21V・22Vから検出された後期から晩期の遺物包含層出土の土器群で、後期前半の土器群については別稿で（文献３）、後期中葉から後半の土器群について次回に報告予定である。また、これらの資料の出土地点は昨年報告した石棒・石剣（文献４）および報告書に掲載されている土偶・土版等の土製品、出土地点とも対応させるために、図版は土器の群別に構成せずに調査区毎にまとめた。報告書掲載土器および年報16掲載土器については報告１－１（報告書第２分冊第１図１の遺物）・年報１（年報16の１の遺物）として掲載番号を変更せずに用いた。土製品・石製品については、水洗・注記段階でピックアップ・台帳作成を行い、実数に近い数字が出されているが、土器については後日の接合を考慮し敢えてピックアップを行わなかった（註１）。今回対象にした資料は、現地でドットマップを作成して取り上げたものが中心で、層一括のものは時間の関係で対象にしていないが、土器の出土傾向は今回の資料で窺えると思われる。第１地点は取り上げ番号を（　）内に記した。

２．新提示の土器の分類

第Ⅰ群土器：後期末葉の安行２式土器（31・32・244・257・259・286・416・471・472）

第Ⅱ群土器：晩期前葉の安行３a式土器（3・5・94・95・169・170・236・238・251・392・399・400・404・412～414・430・431・470・494）

第Ⅲ群土器：晩期前半の安行３b・３c・前浦式土器　各分類内で、１．縄文を施す土器　２．縄

第１図　内野第１遺跡縄文時代遺構集中区

文を施さない器　3．刺突を施す土器　4．細密条線を施す土器　5．注口土器、に区分して記載していく

第1類：安行3b・3c式土器

A種：大形波状口縁を有する土器　1．(6・31～37・171・242・266・267・300・326)　2．(38・295)　3．(22・37・39・294)

B種：方形（長楕円形）枠状文の土器　1．(96・98・100・101・298・313・322・401)　2．(27・28・42～45・99・102～104・268・269・289～291・296・340・466)　3．(46・292)　5．注口土器(309)

C種：連続する三叉文の土器　1．(407)

D種：S字状の連続入組文の土器　1．(51・188・208・241・255・279・418)　2．(52・366)　3．(53・55・115～117・209・325・473・489)

E種：釣針形沈線文の土器　1．(108・173・203・207・302・303)

F種：連結弧線文の土器　1．(56・198・214・305)　2．(315)

G種：重弧線文の土器　1．(163・329・352・380)　2．(25・69～72・140・141・177・216・217・287・288・336・337・363・369・491)

H種：対向弧線文の土器　1．(114・126・316・328・345・483・493)　2．(報告248－134)

I種：横走する平行線の土器　1．(13・87・119・120・123・124・128・215・487)　2．(24・73・86・175・280・330)　3．(23・74・78・80・129・133～136・145・220・284・355・423・437)

J種：弧線と直線による区画文の土器　1．(127)　4．(2・76・299・327・343)

K種：無文の浅鉢形土器(131・144・147・148・192・226・227・308・351・419・421)

L種：胴下半に波状の弧線文を施す土器(77・663)

第2類：前浦式土器

A種：太い沈線の入組文や渦巻文の土器　1．(204・232)　2．(176・436)　3．(297)

B種：対向入組三叉文の土器　1．(65～68・160・161・174・202・275・277・342・354・370)　2．(18・19・49・50・206・272)　3．(371)

C種：S字状の縄文帯の土器　1．(90・276)

D種：長楕円形または弓形の区画内にの字状文を描く土器　1．(232・306・372)

E種：口縁と胴部に平行な縄文帯間にの字状文を描く土器　1．(14・15・356)

F種：長舟形の枠状文の土器　1．(194)

G種：三角文を陰刻する土器　1．(3・64・173・180・198・231・265・273・368・491)　2．(206)

H種：対向三角文の土器（181・359・364・425・461）

第３類：搬入品の土器

A種：大洞系土器（486・報告135・年５・６・52）

B種：雷文の土器（496）

第Ⅳ群土器：晩期中葉の安行３d式土器

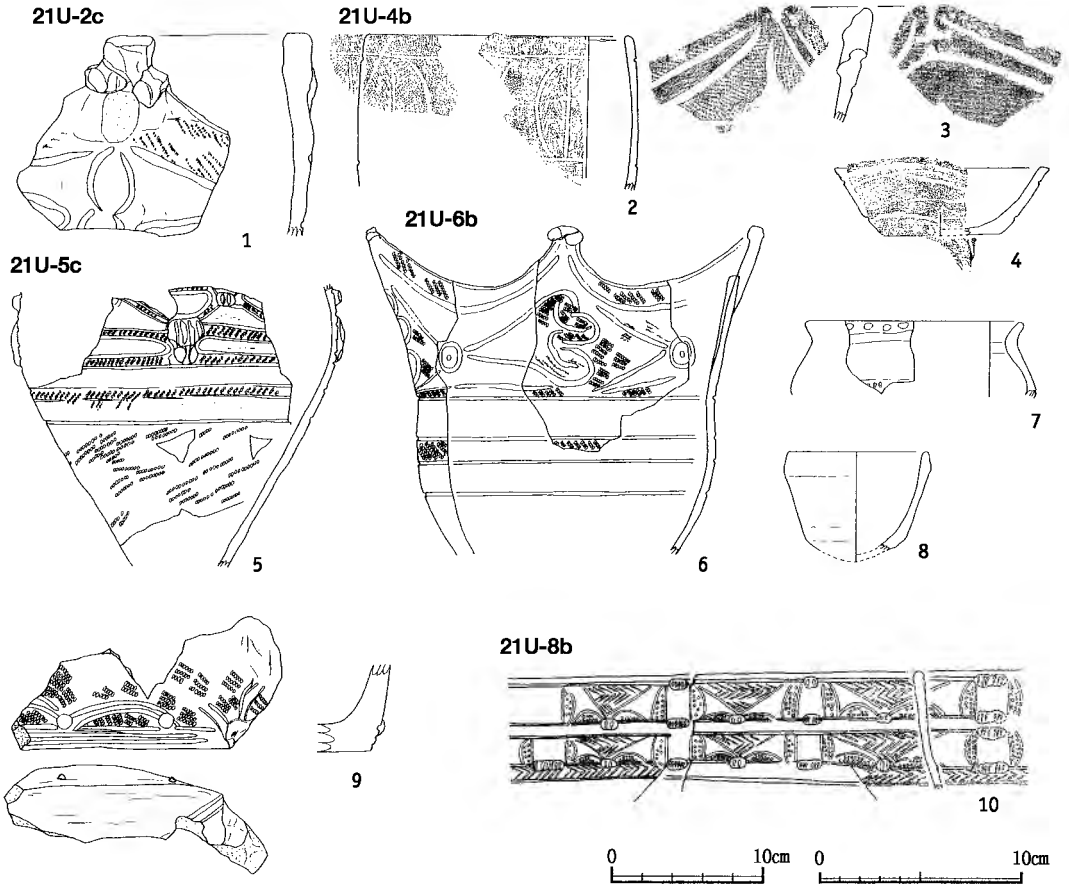
第Ⅴ群土器：晩期末葉の千網式土器（339）

第Ⅵ群土器：粗製土器

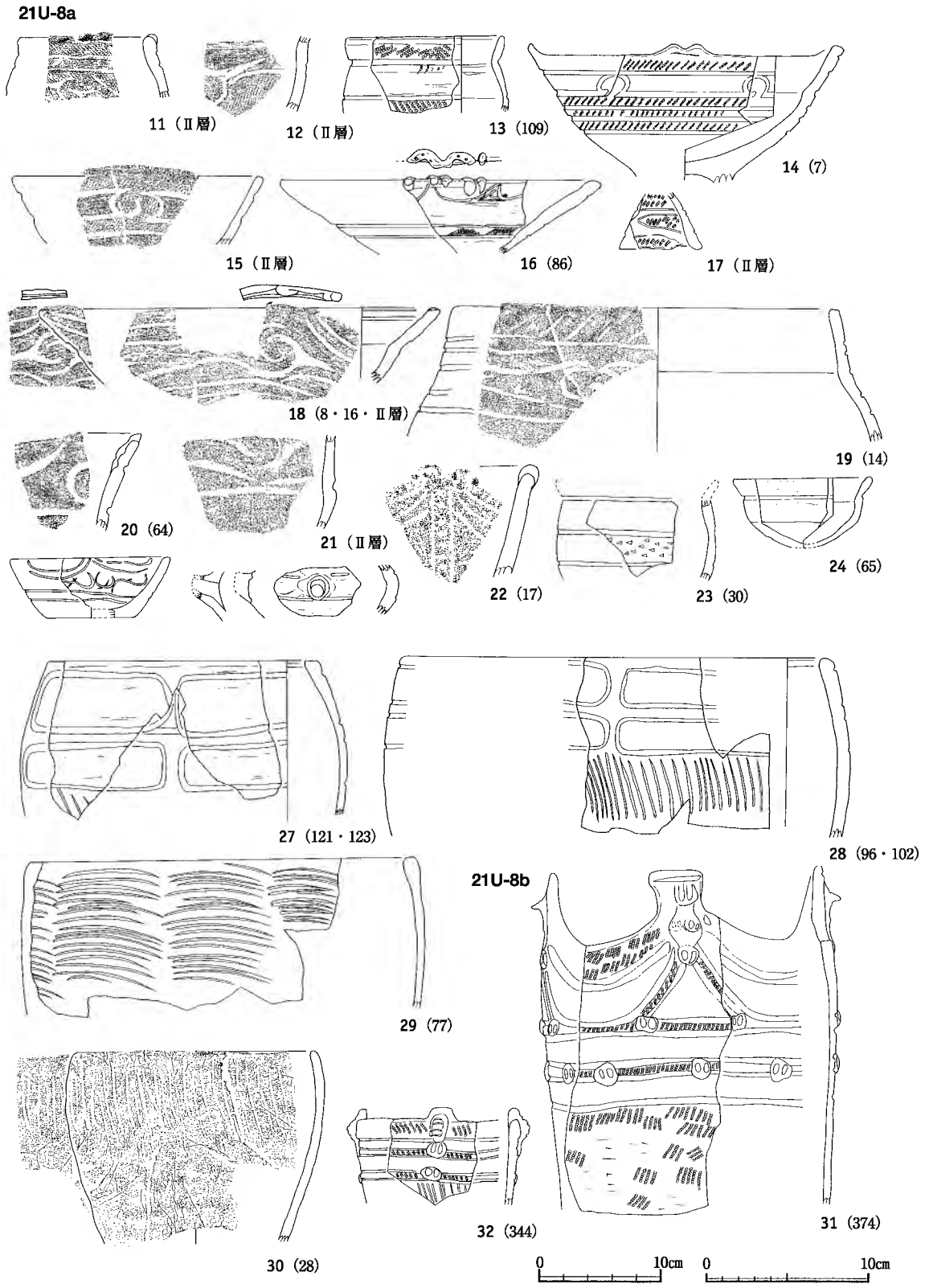
第１類：紐線文の土器

A種：胴部が括れ２条の紐線間に横走の条線を施す土器（164・165）

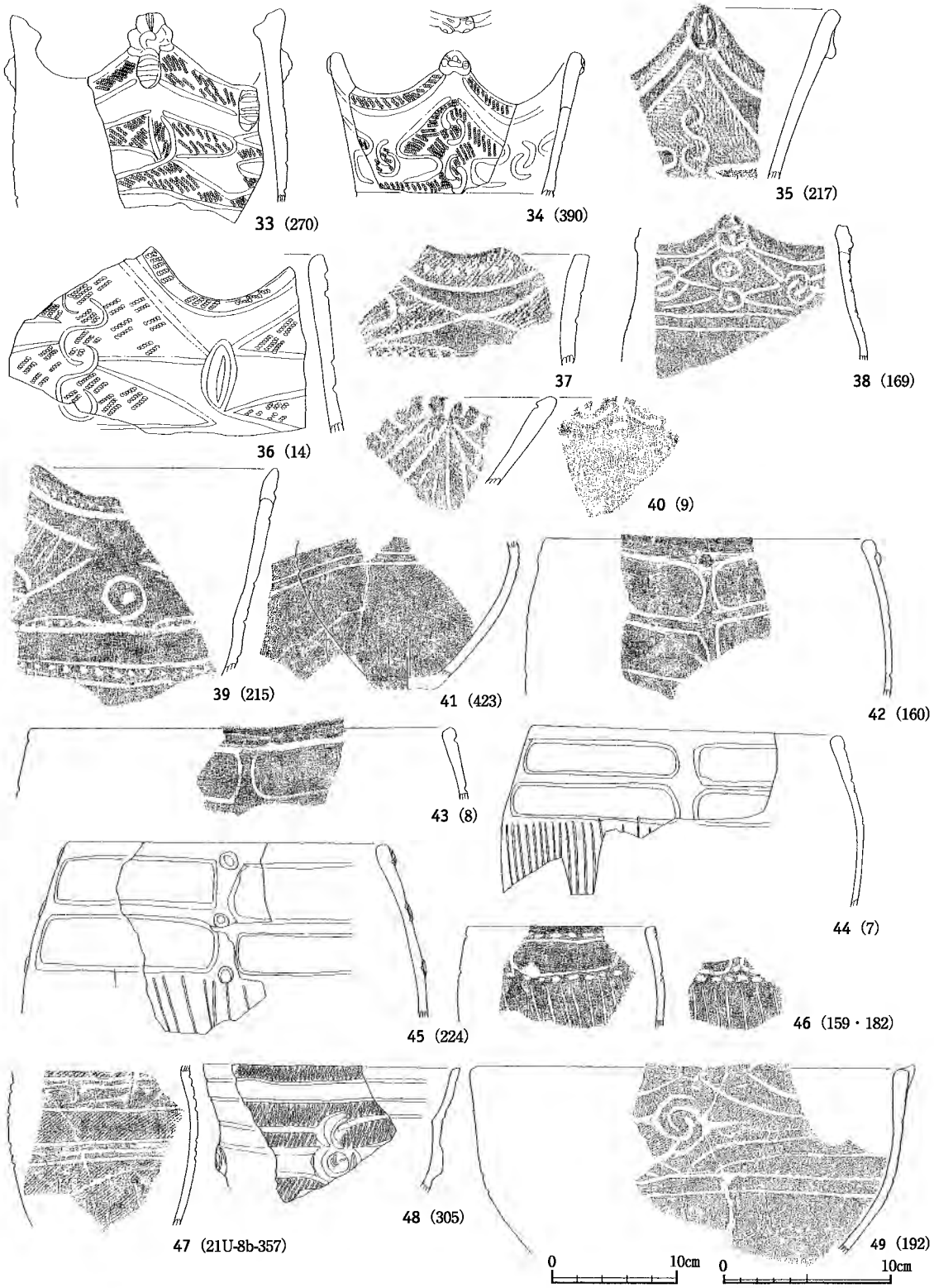
B種：砲弾形の紐線文土器　１．口縁部に１条の紐線文を施す土器　a．紐線上に縄文を施す土器（83）　b．紐線上に爪形文を施す土器（150・222）　c．紐線上に指頭圧痕を施す土器（474）　２．口縁部と胴部に２条の紐線文を施す土器　a．紐線間は横



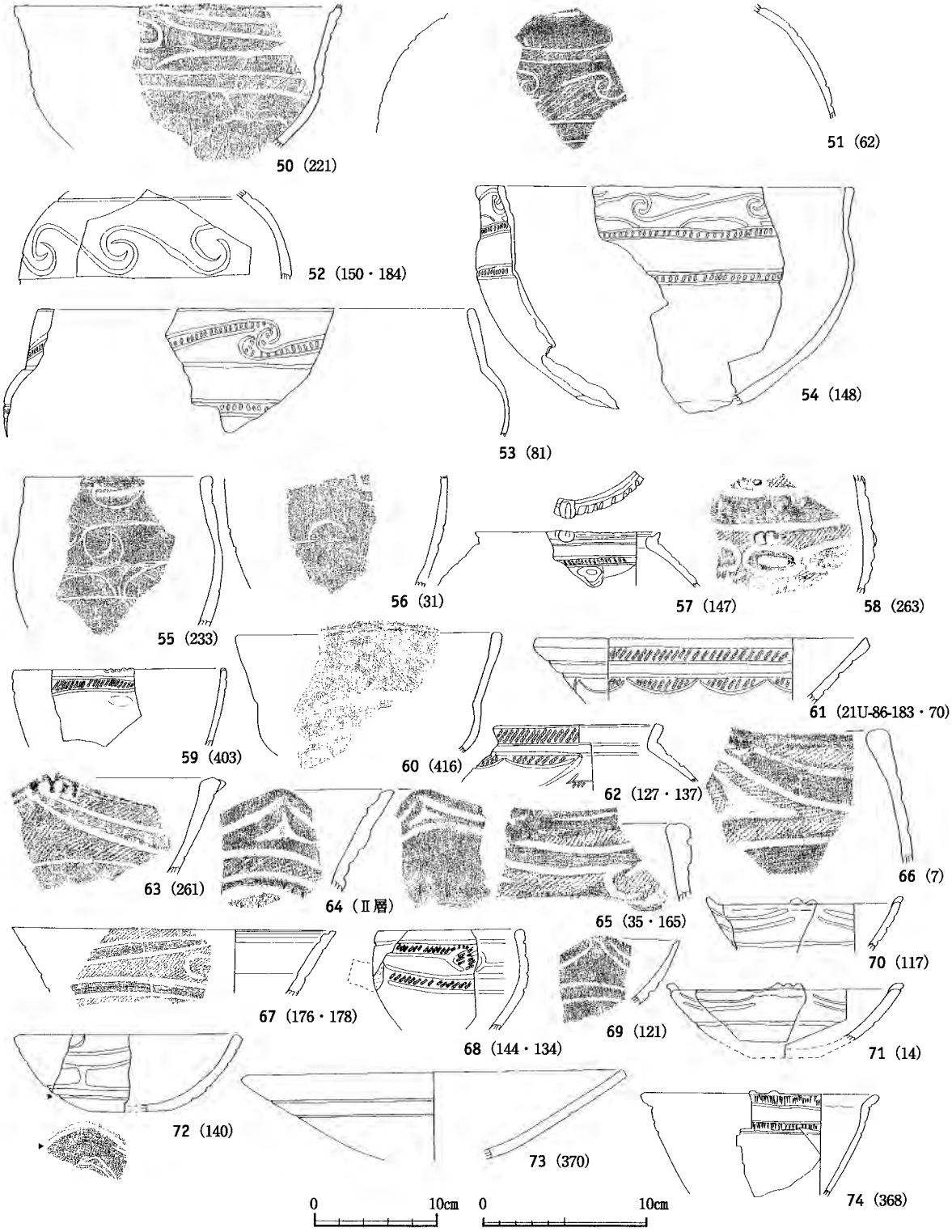
第２図　調査区出土遺物(1)（21U－２c～６d・８b）－第１地点(1)



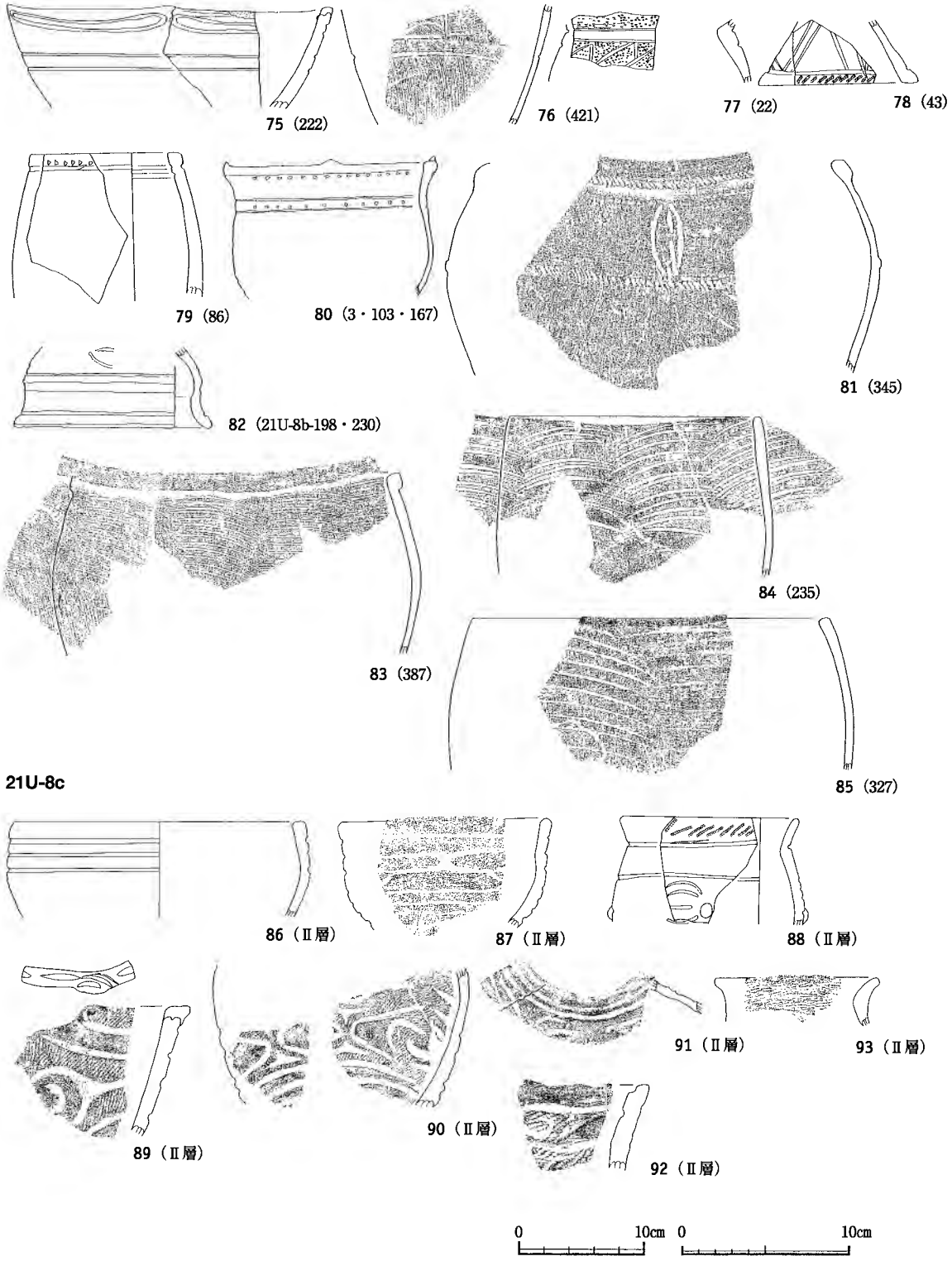
第３図　調査区出土遺物(2)（21U－８ａ・８ｂ)－第１地点(2)



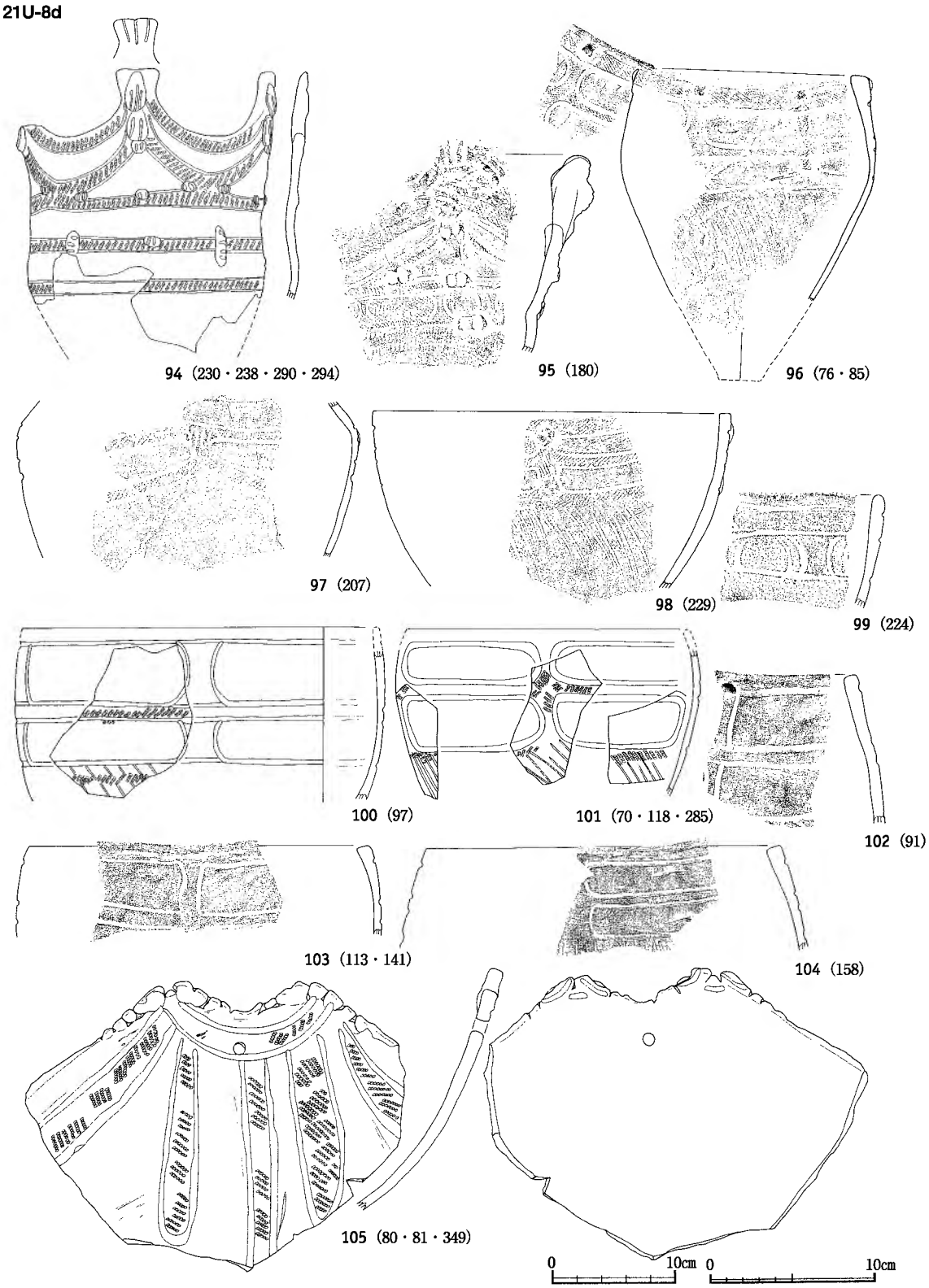
第４図　調査区出土遺物(3)（21U－８b)－第１地点(3)



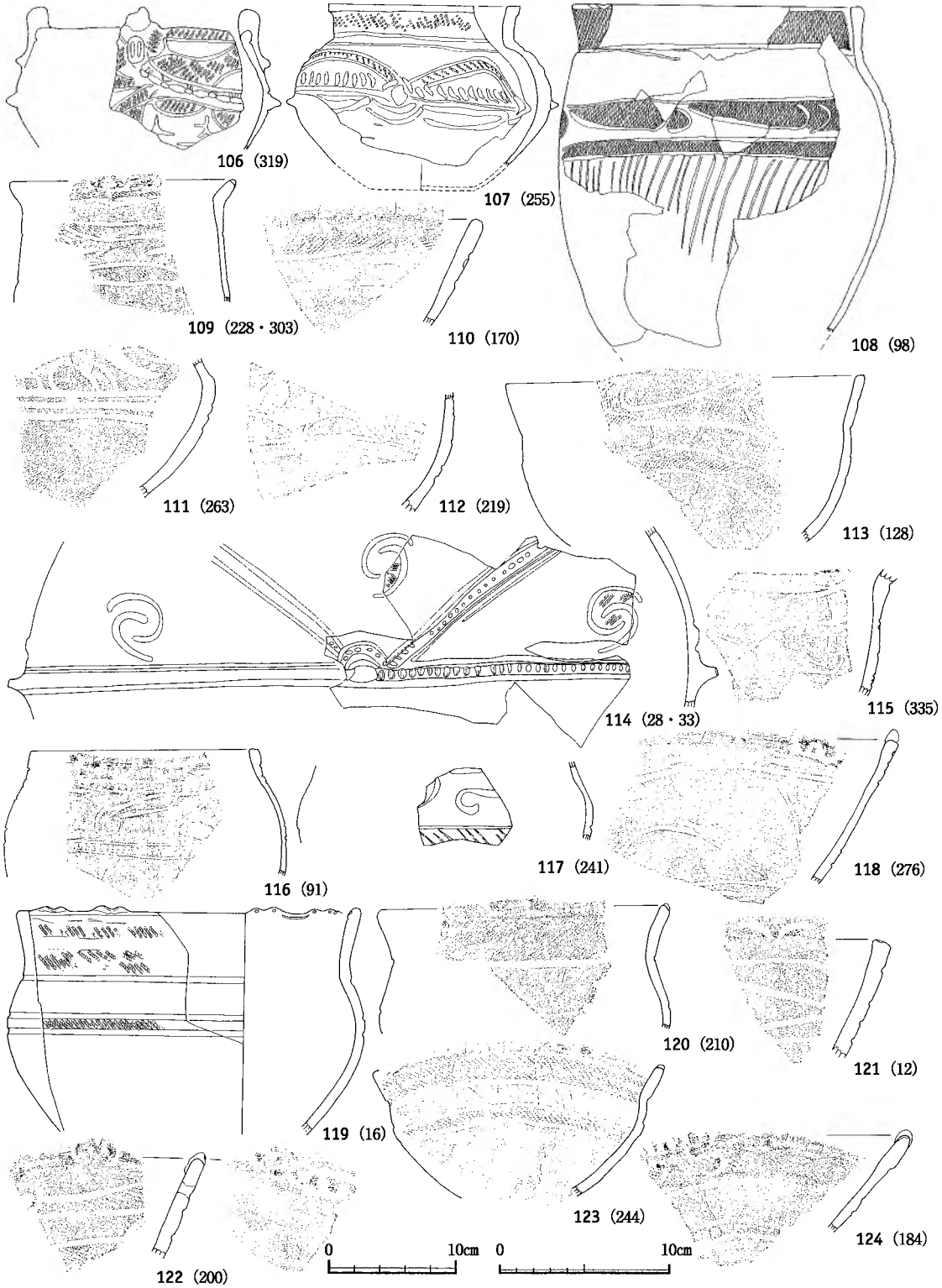
第５図　調査区出土遺物(4)（21U－８b）－第１地点(4)



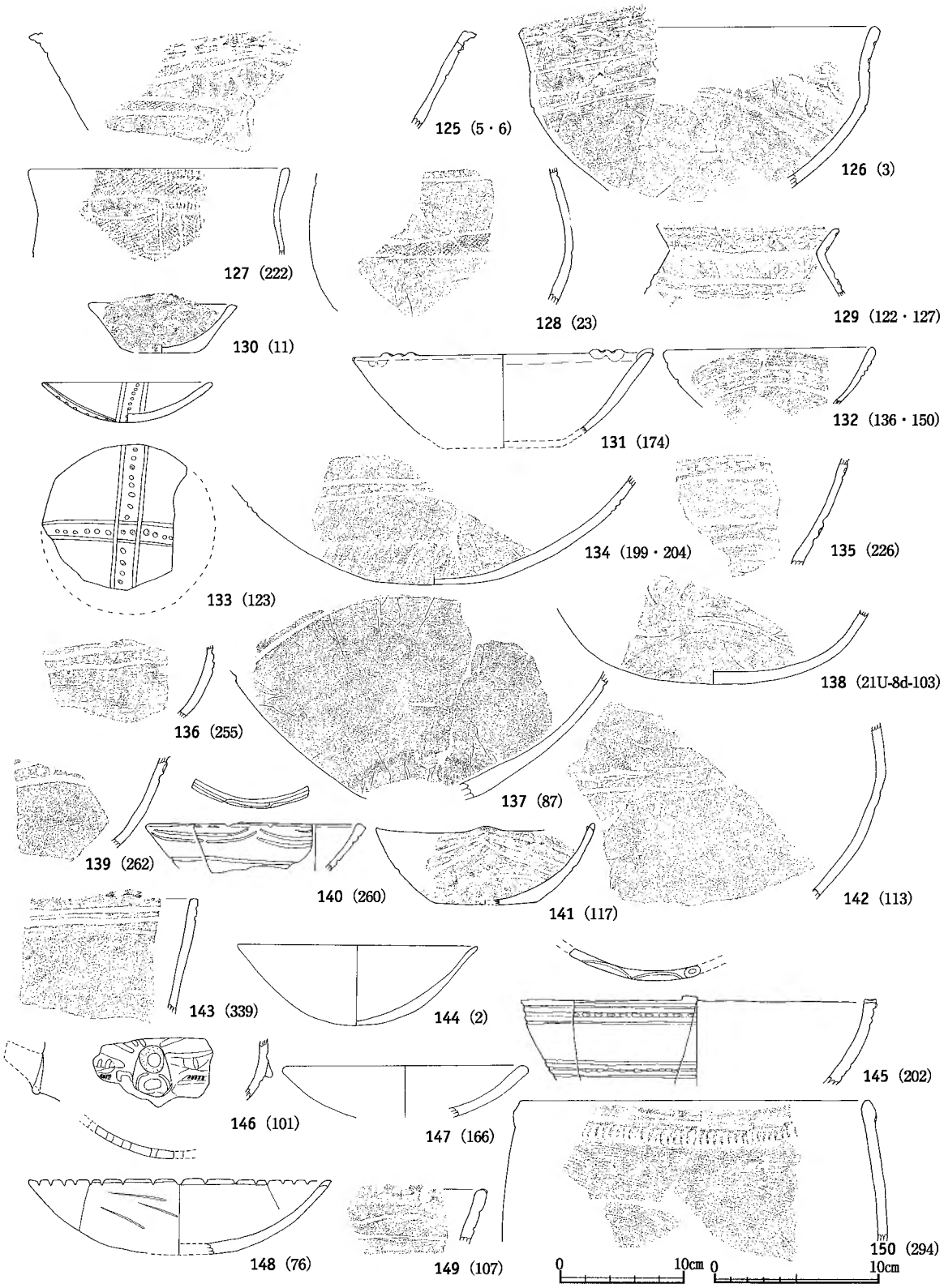
第６図　調査区出土遺物(5)（21U－８b・８c)－第１地点(5)



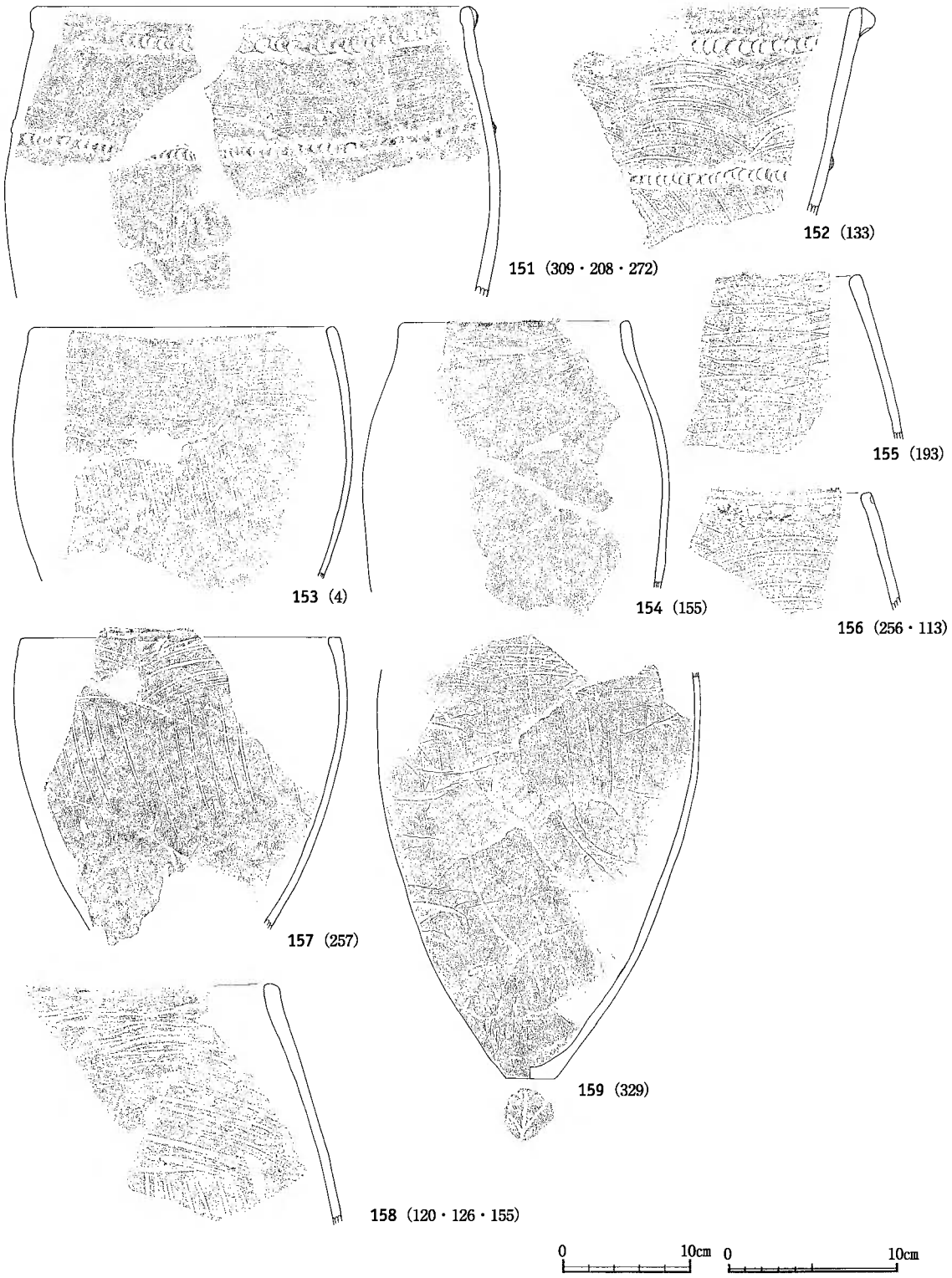
第７図　調査区出土遺物(6)（21U－８d）－第１地点(6)



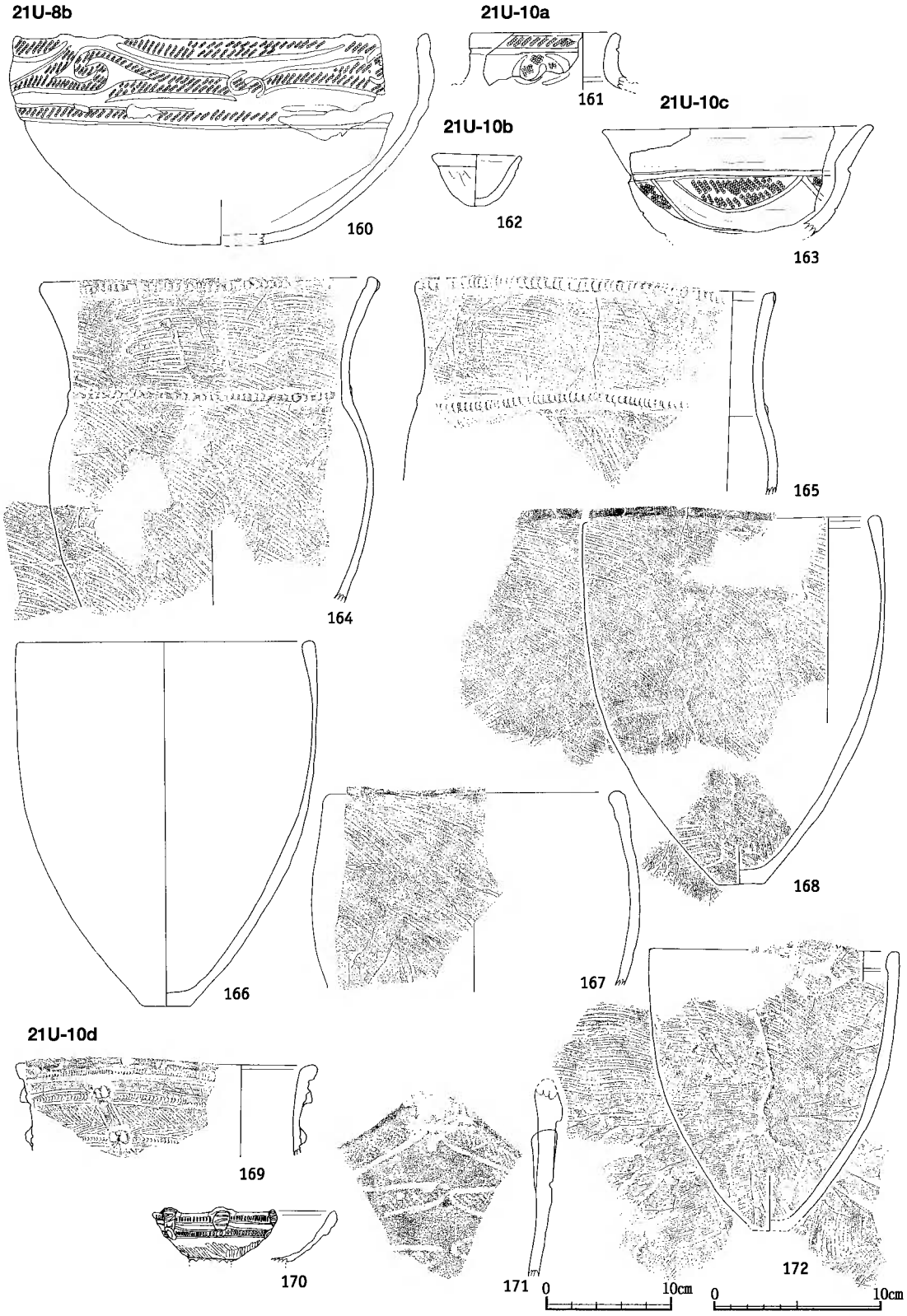
第８図　調査区出土遺物(7)（21U－８d)－第１地点(7)



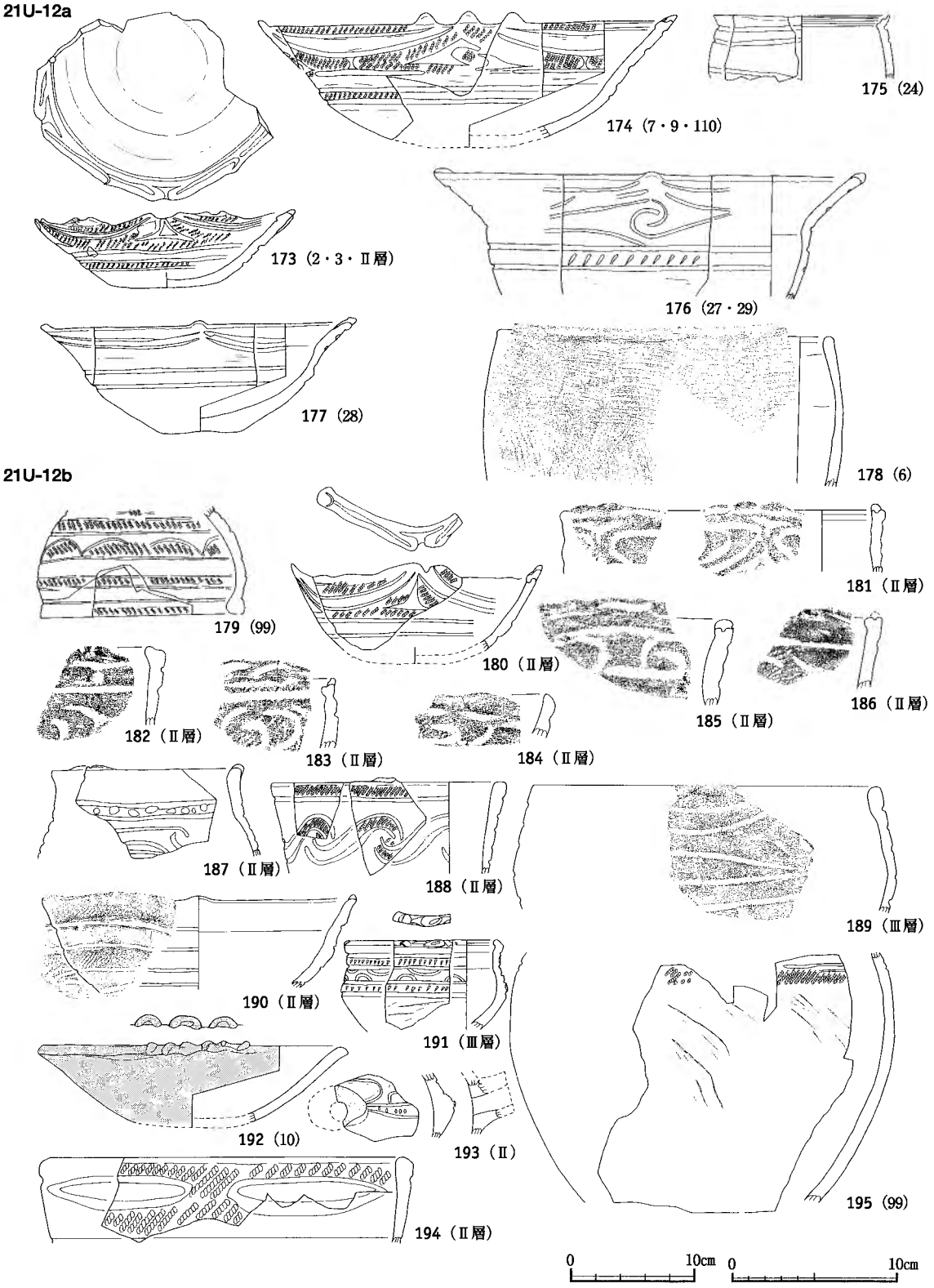
第９図　調査区出土遺物(8)（21U－８d)－第１地点(8)



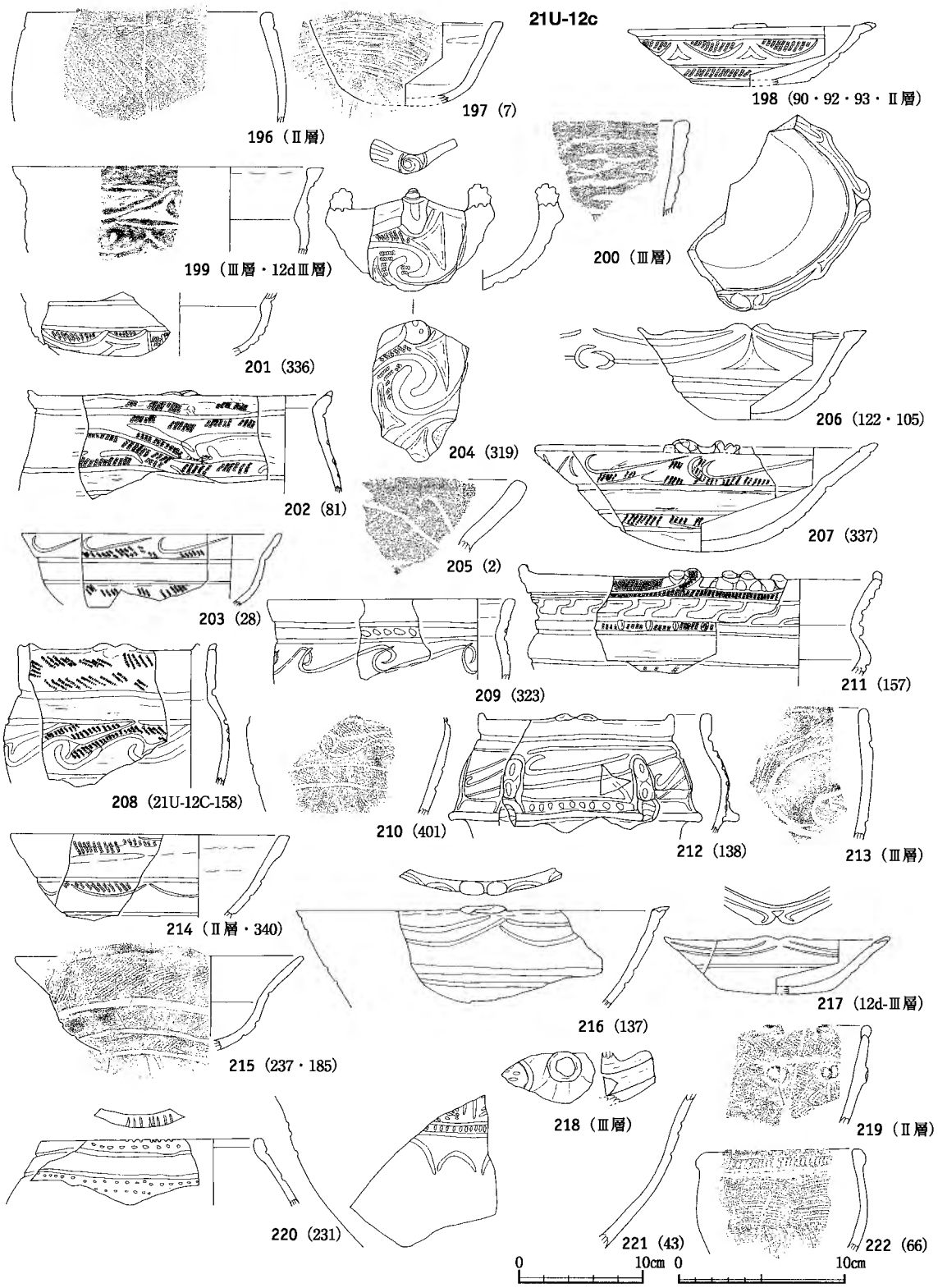
第10図　調査区出土遺物(9)（21U－8d)－第1地点(9)



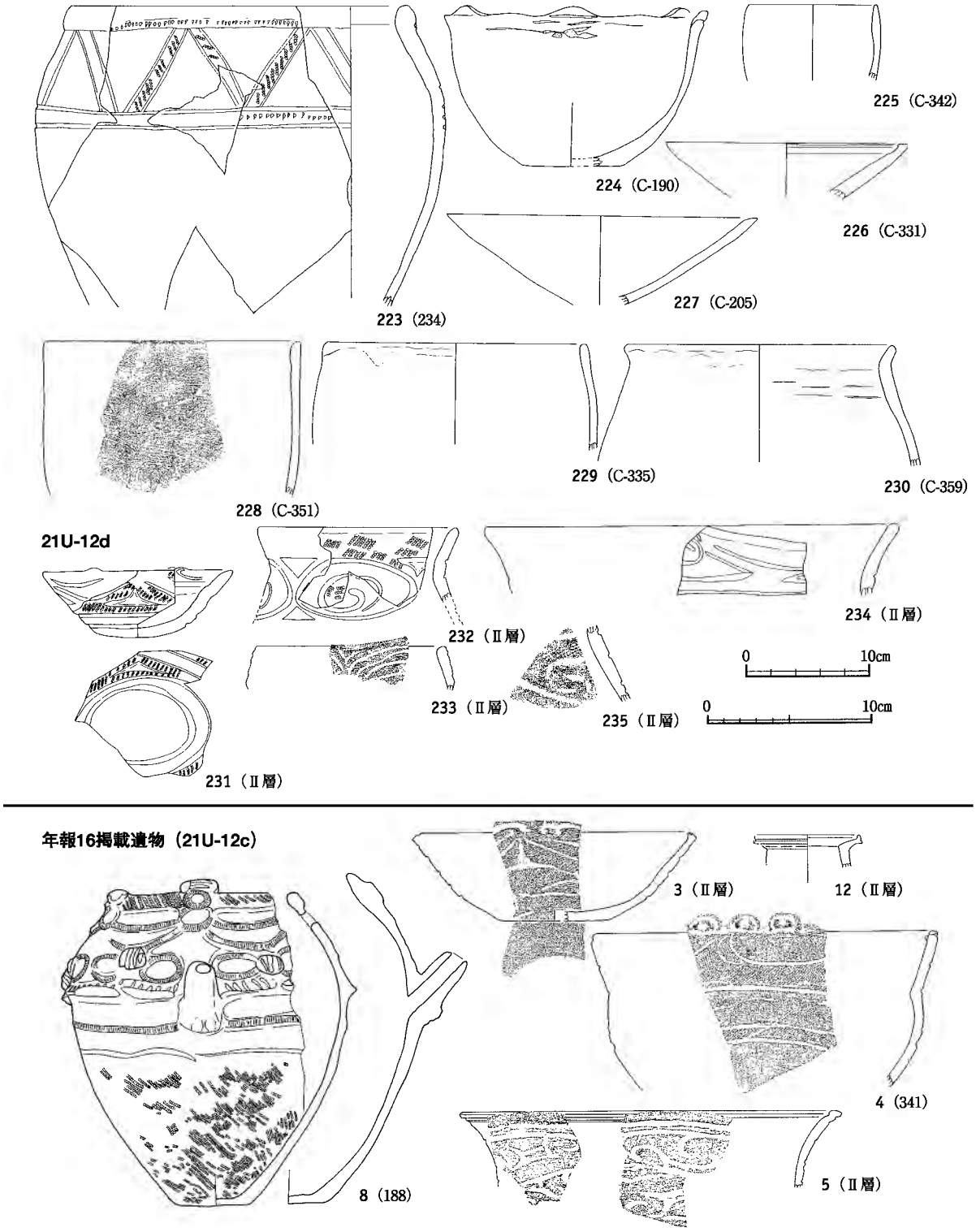
第11図　調査区出土遺物(10)（21U－8b・10a～10d)－第1地点(10)



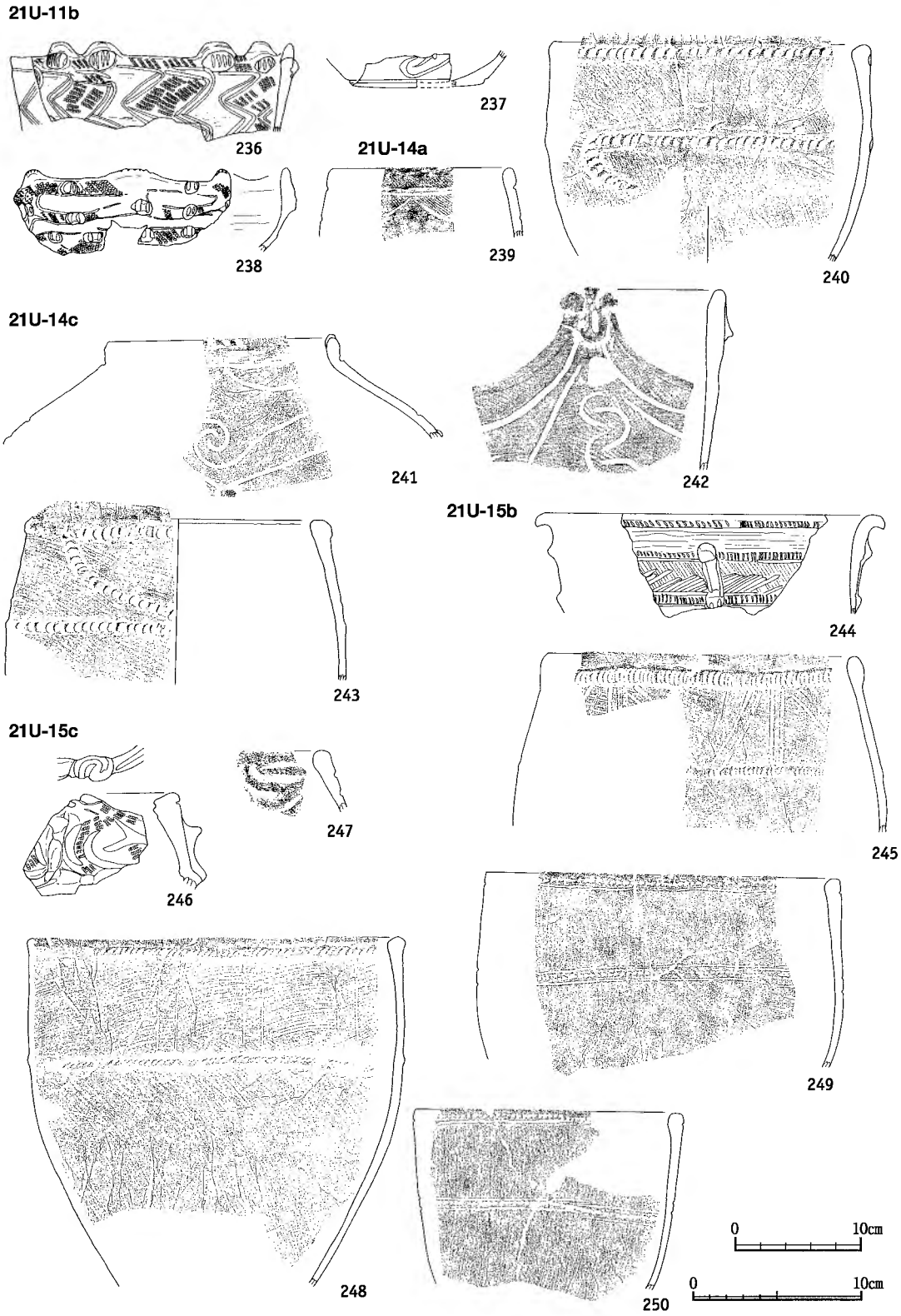
第12図　調査区出土遺物(11)（21U-12a・12b)ー第１地点(11)



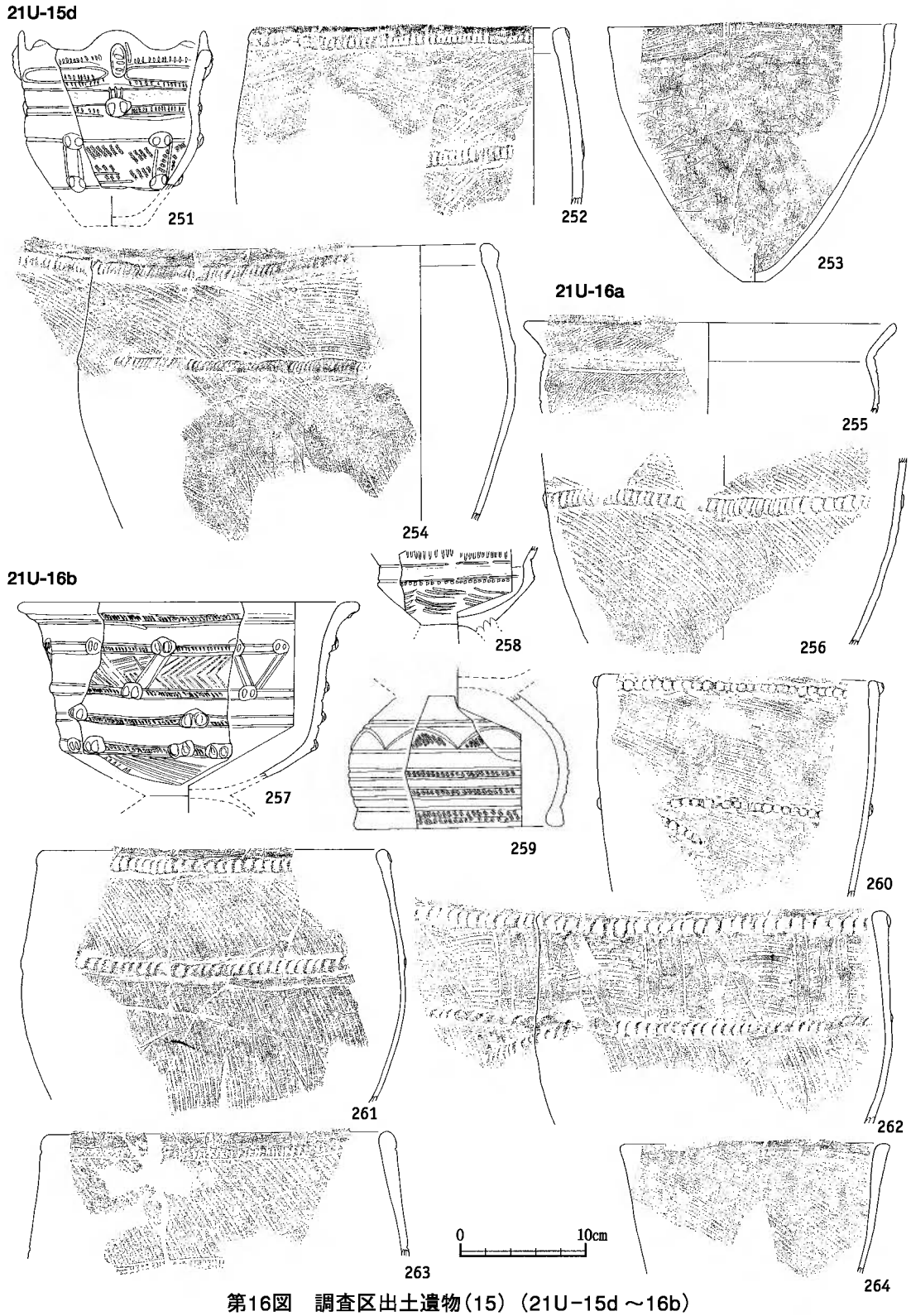
第13図　調査区出土遺物(12)（21U−12b・12c)ー第１地点(12)



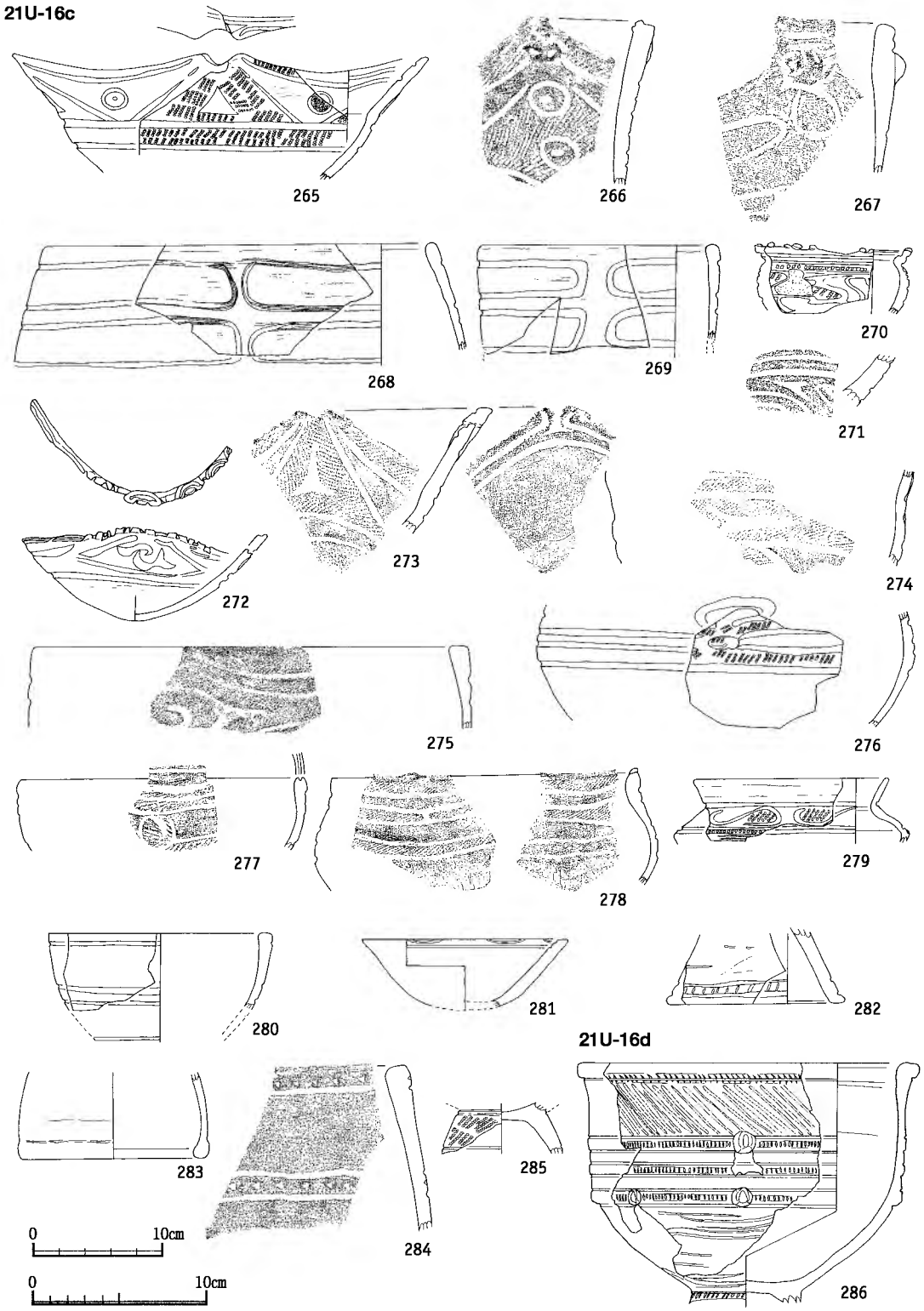
第14図　調査区出土遺物(13) (21U−12c・12d)(上)・年報16掲載遺物(下)ー第1地点(13)



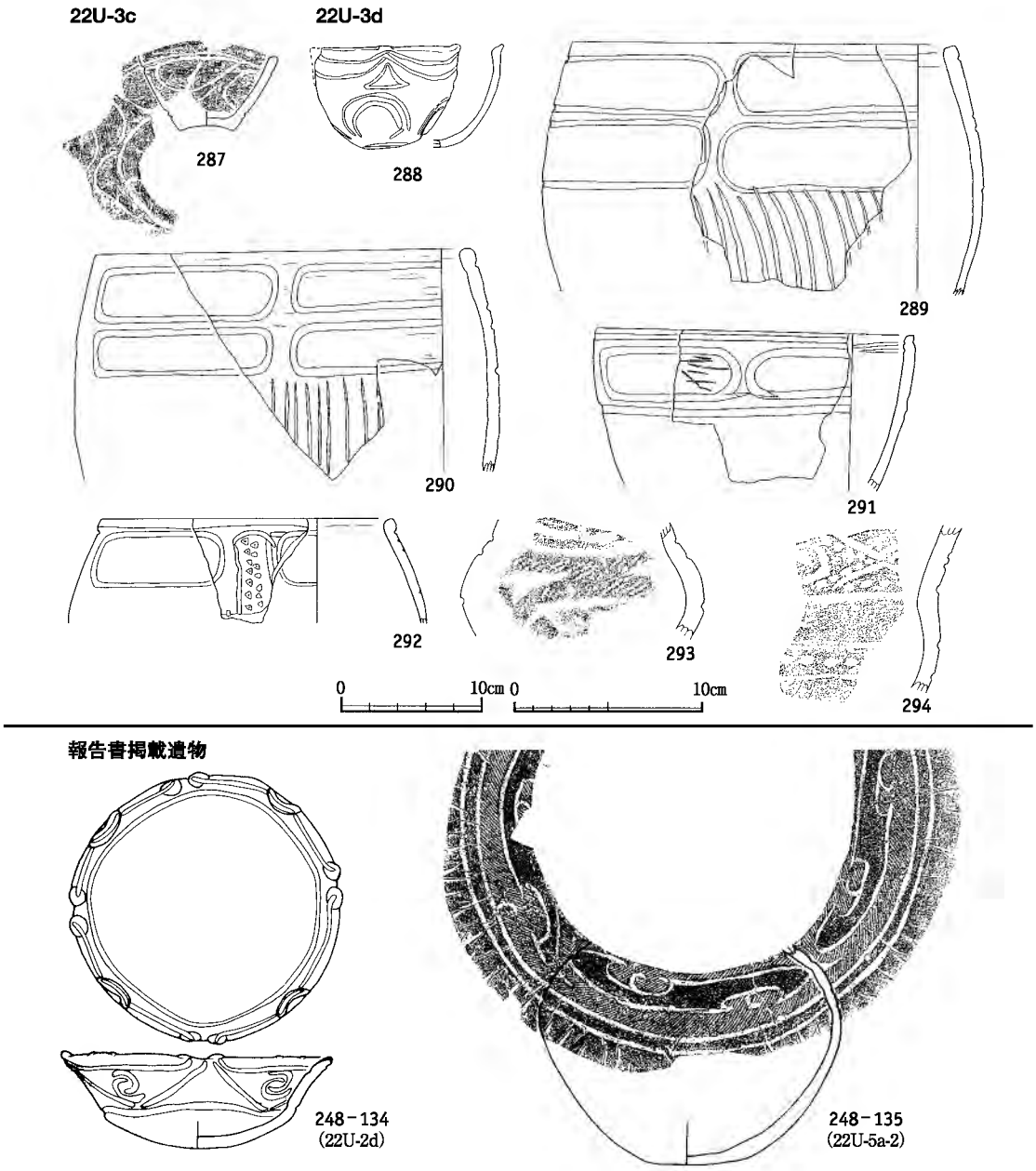
第15図　調査区出土遺物(14)（21U−11b・14a ～15c）



第16図　調査区出土遺物(15)（21U−15d ～16b）

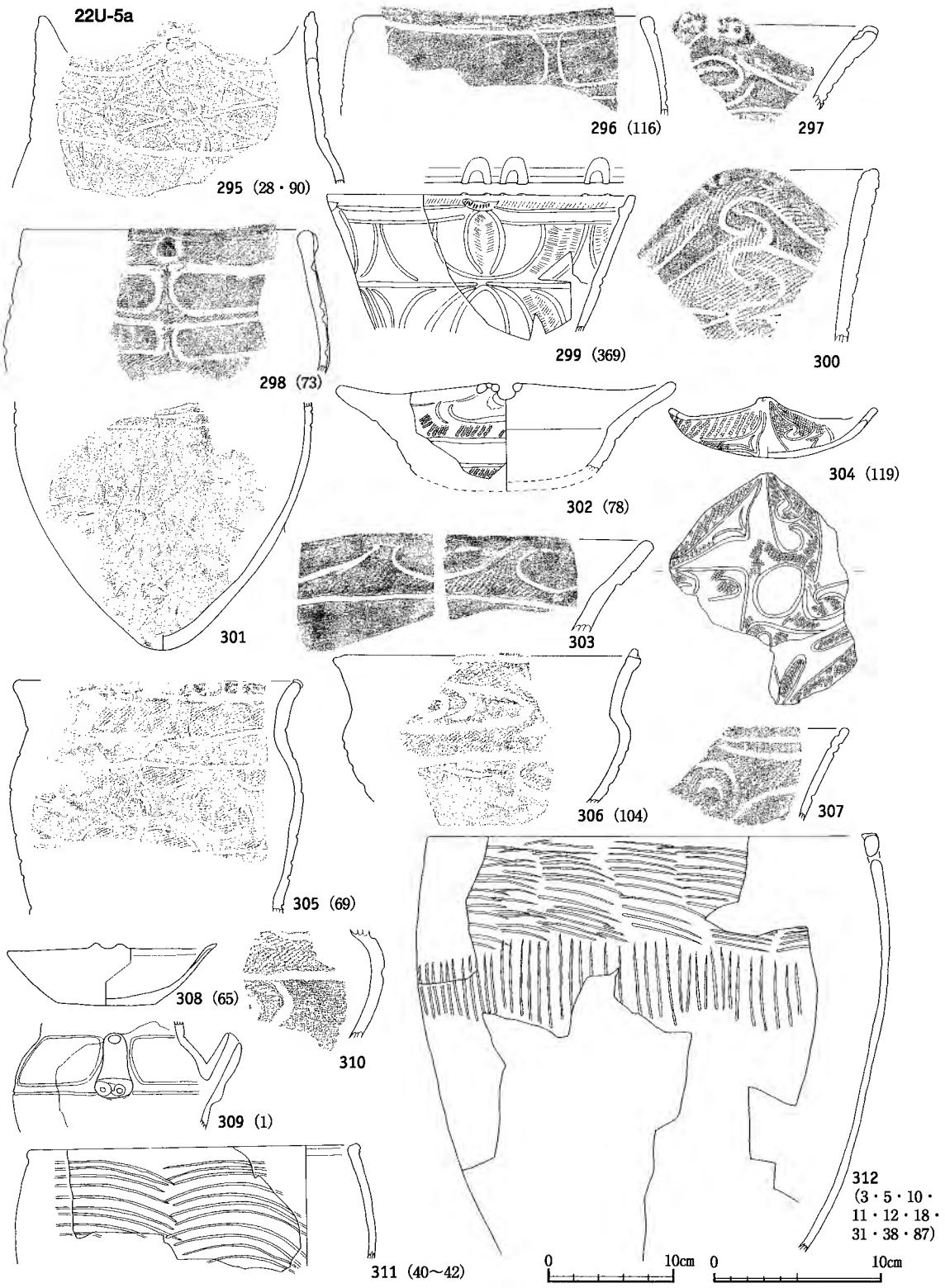


第17図　調査区出土遺物(16)（21U−16c・16d）

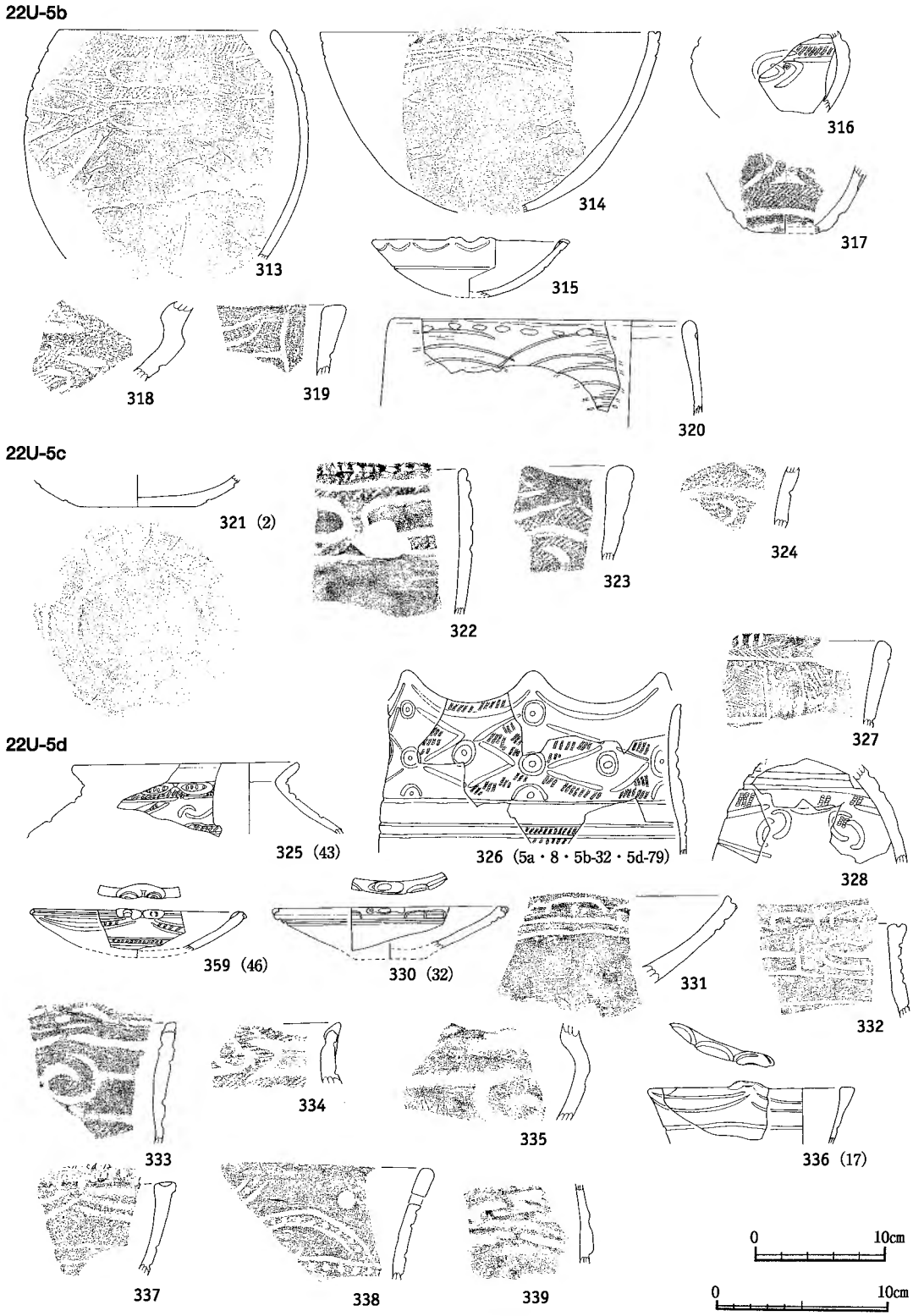


第18図　調査区出土遺物(17)（22U－3c・3d）（上）・報告書掲載遺物(下)

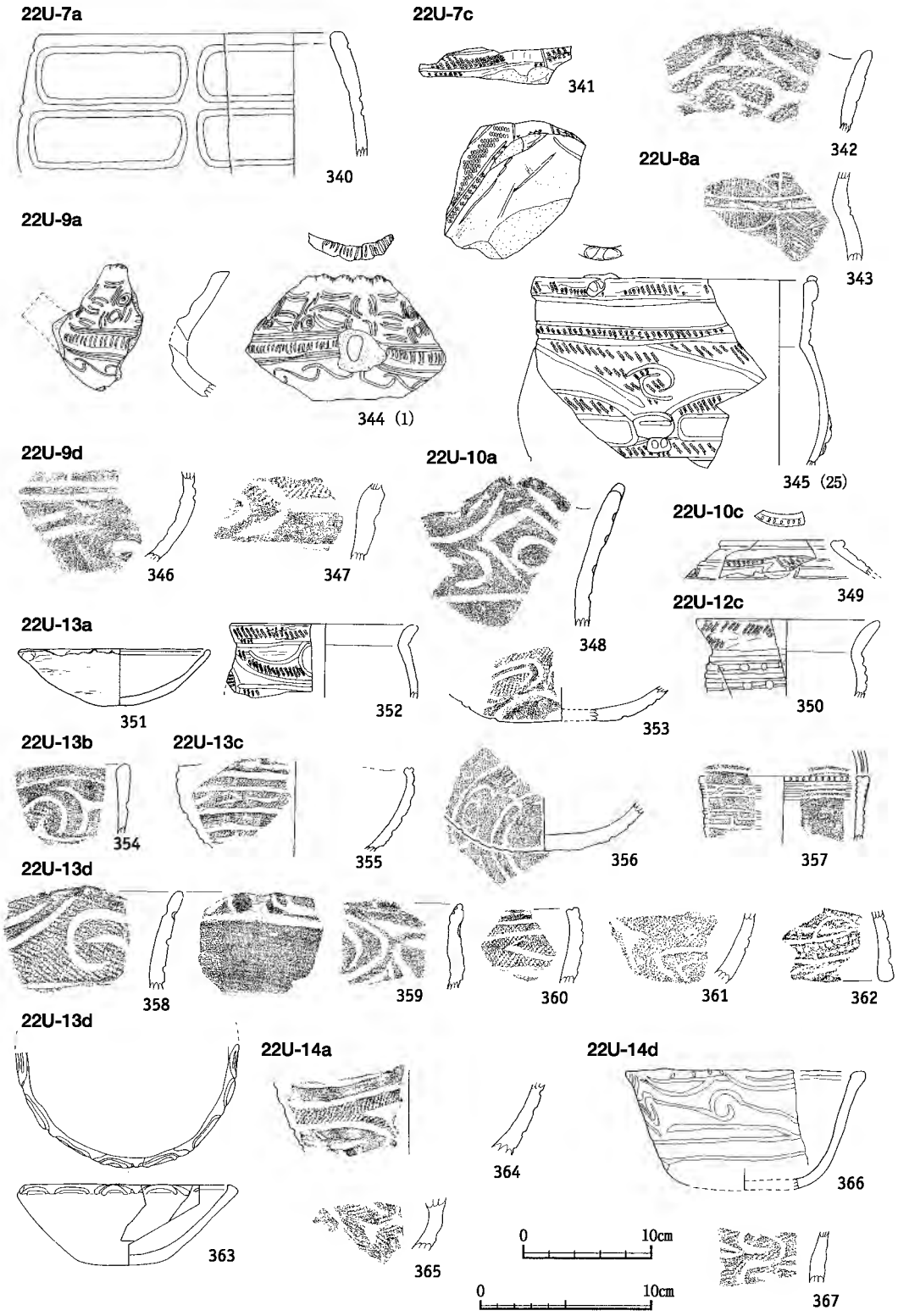
走、胴下半は斜走の条線を施す土器（150・151・420・422・426・467・475・476）b. 紐線間と胴下半に同一の斜条線を施す土器（240・252・254・261・382・393・407） c. 紐線間に縦の平行線を施す土器（223・245・246・262・383・395・396・410） d. 紐線間に弧線文を施す土器（81・374・394・408） e. 紐線間に斜めに爪



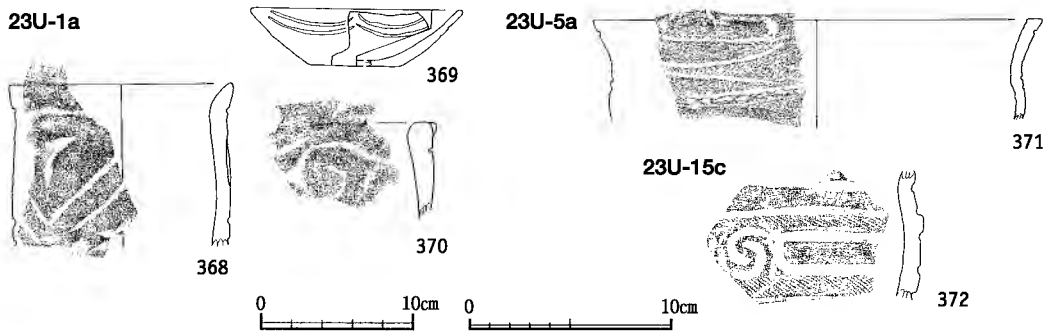
第19図　調査区出土遺物(18)（22U－5 a)－第１地点(14)



第20図　調査区出土遺物(19)（22U－5ｂ～5ｄ)－第１地点(19)



第21図　調査区出土遺物(20)（22U－7ａ～14d）



第22図　調査区出土遺物(21)（23U－1ａ～15c）

形文を施した紐線を施す土器（243）　f. 紐線と爪形文を沈線と列点で表現している土器（249・250・263・384・387・388）

第２類：紐線文を施さない条線文土器

Ａ種：胴部上半が横、胴部下半が斜めの条線を施す土器（84・85・153～157・178・228・260・312・386・411・468）

Ｂ種：胴部上半に横の条線のみを施す土器（29・253・311・405）

Ｃ種：胴部上半に縦の条線のみを施す土器（30）

Ｄ種：胴部上半から斜めの条線を施す土器（167・168）

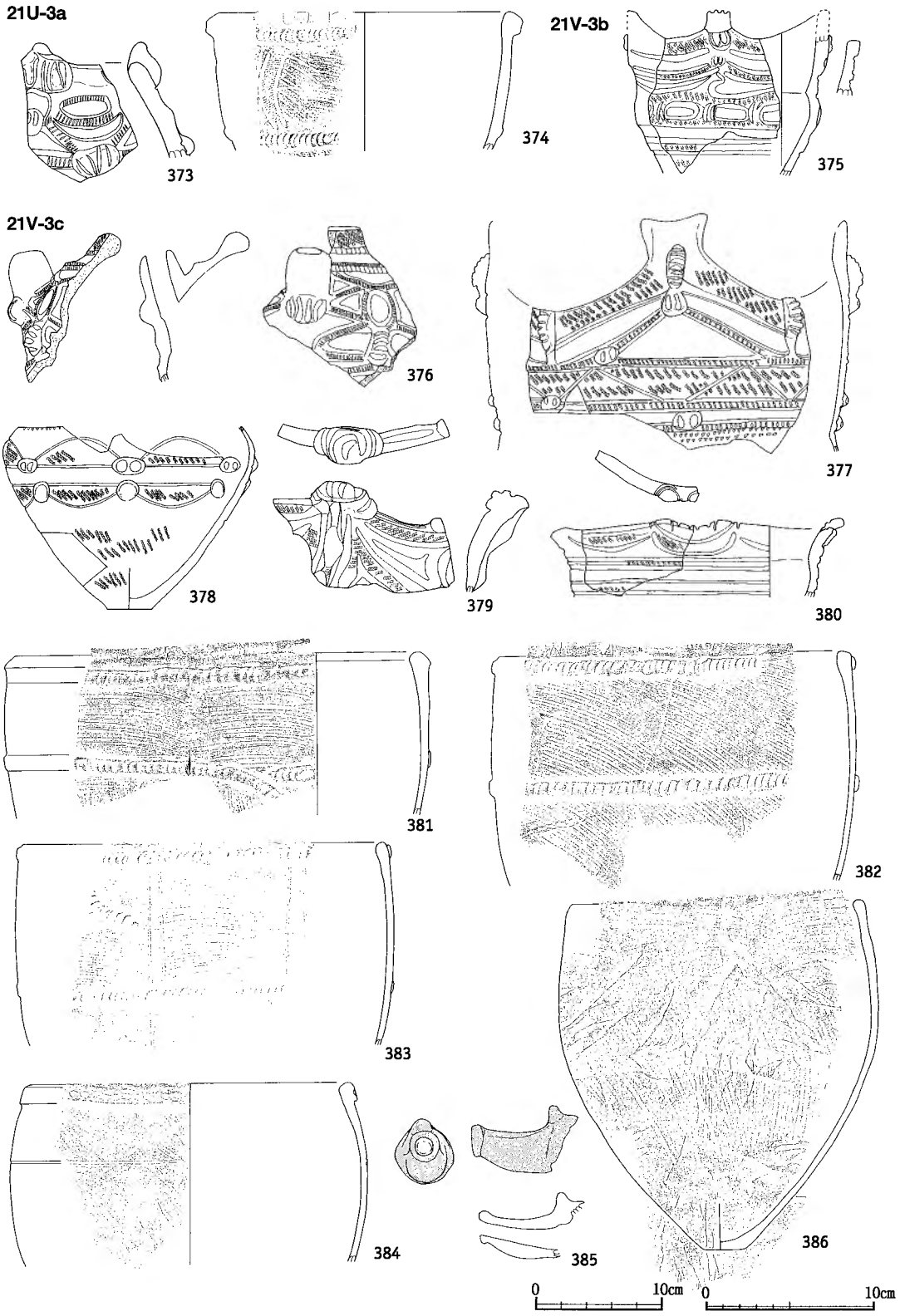
Ｅ種：口縁部に刺突を施す土器（159・196・320）

第３類：砲弾形を呈する無文土器（166・229・230・389・434）

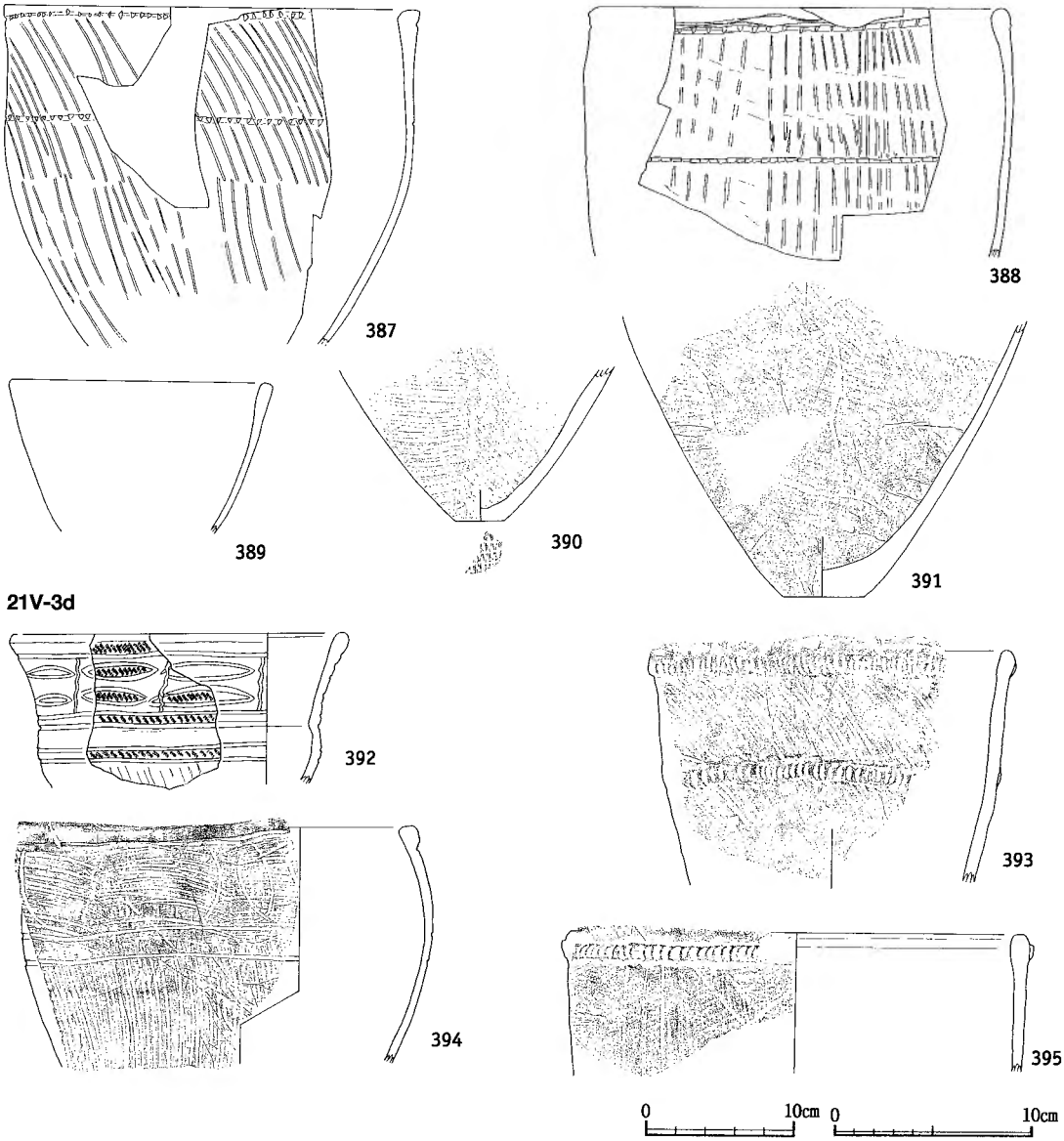
第Ⅷ群土器：注口土器（146・193・218・417・424・427・428・469）

第Ⅸ群土器：角底形土器（9・341・339・415・477）

前記の分類は鷹野光行氏の分類を参考にした（文献５）。同氏は埼玉県馬場小室山遺跡514号土壙と黒谷田端前遺跡出土土器を安行３b式に含めた。1992年に行われたシンポジュウムでは、前者を安行３a式に、後者を安行３c式に比定しており（文献６）、弧線文土器の位置付けも問題となっている。当遺跡では52・53・228・報告248−134の土器が黒谷田端前遺跡の土器に相当する。第Ⅲ群第２類Ｂの土器は、前浦１式土器の縄文を施さないもので、当遺跡の晩期の主体を占める。西広貝塚の報告時に指摘され（文献７）、近年茨木県拾二ゴゼ遺跡（文献８）や下大田貝塚旧河道からまとまって出土し、前浦式直前段階として位置付けられている（文献９）。2002年の六通貝塚獣骨層の調査では、前浦２式以降が主体として検出されており、前浦式土器が２分されるのは明確である（文献10）。10の、瘤と細密条線および縦の弧線文内に円形刺突文を施す手法は、従来の姥山Ⅲ式の特徴であるが、横の連続弧線文内に円形刺突文を施す手法は、安行３c式に特徴的に認められる。大洞系土器とした年報５・58・62は大洞Ｃ１式土器で、特に年報５の壺は胎土が精選されており搬入品と思われる。報告248-135は大洞Ｃ1



第23図　調査区出土遺物(22)（21V－3ａ～３ｃ）

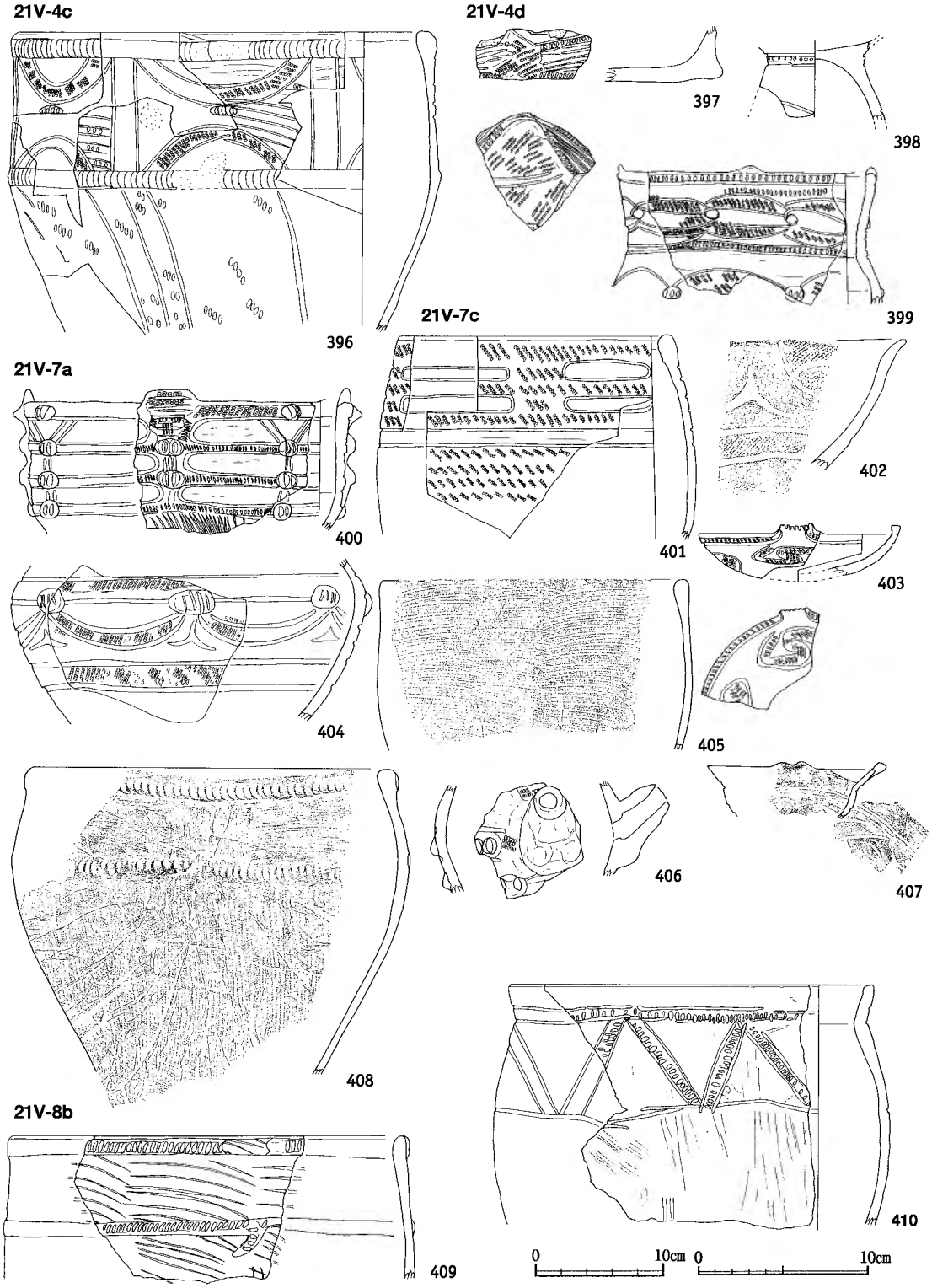


第24図　調査区出土遺物(23)（21V－3c・3d）

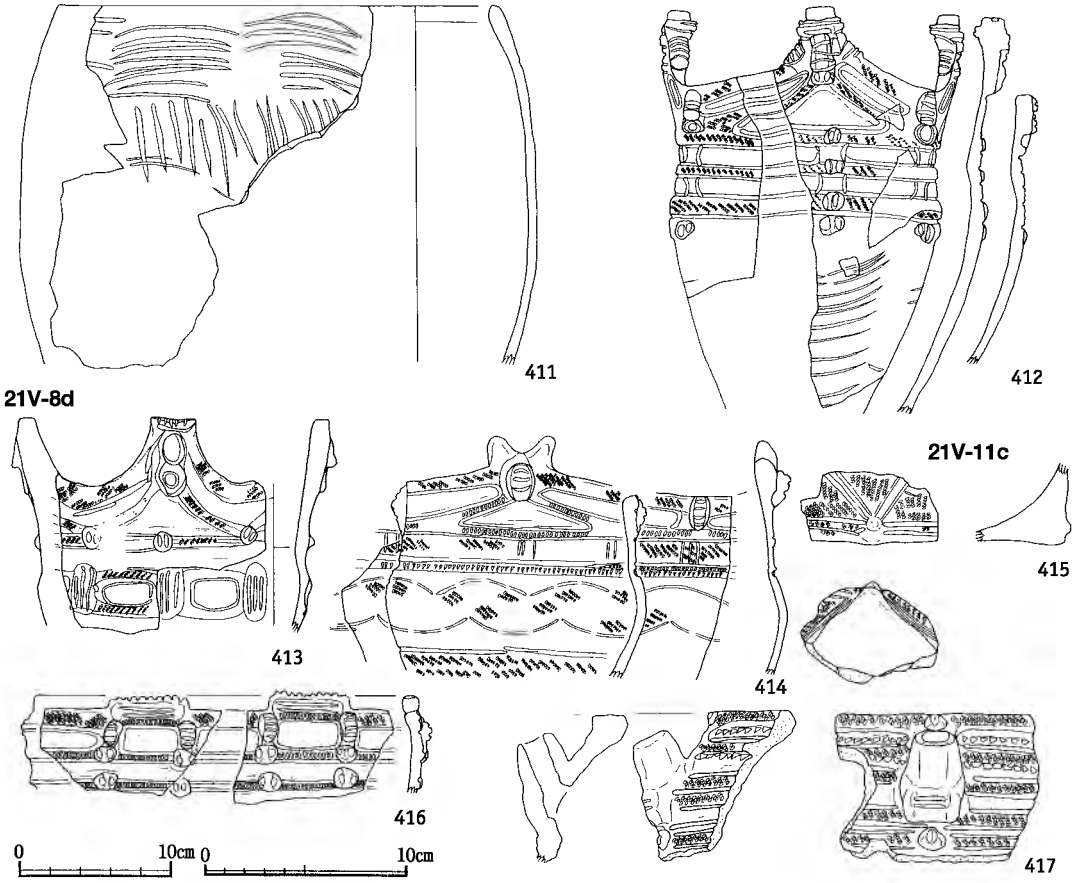
式の雲形文を模倣したと思われるが、舟型の枠状文や三叉文等前浦式の文様描出が色濃く認められる。第Ⅵ群土器とした粗製土器については古谷渉氏の分析がある（文献11）。

3．出土地点の分析

第1地点（第2図10～第14図235・第19図295～第20図339）（第21図344・第32図）－21U-8・12と22U-5グリッドを中心に2ブロックが検出されている。古墳時代以降の溝36・37により、



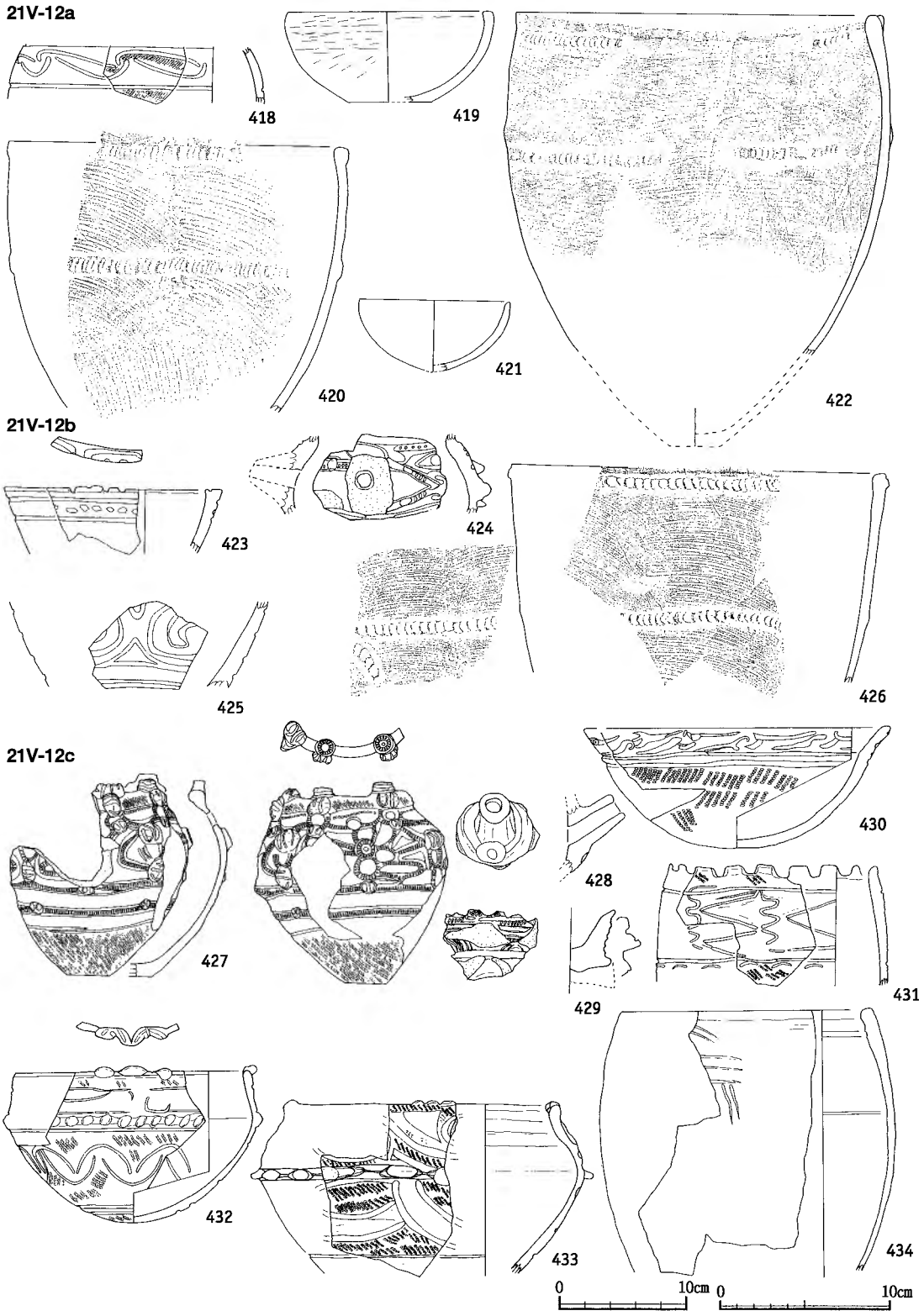
第25図　調査区出土遺物(24)（21V－4c～8b）



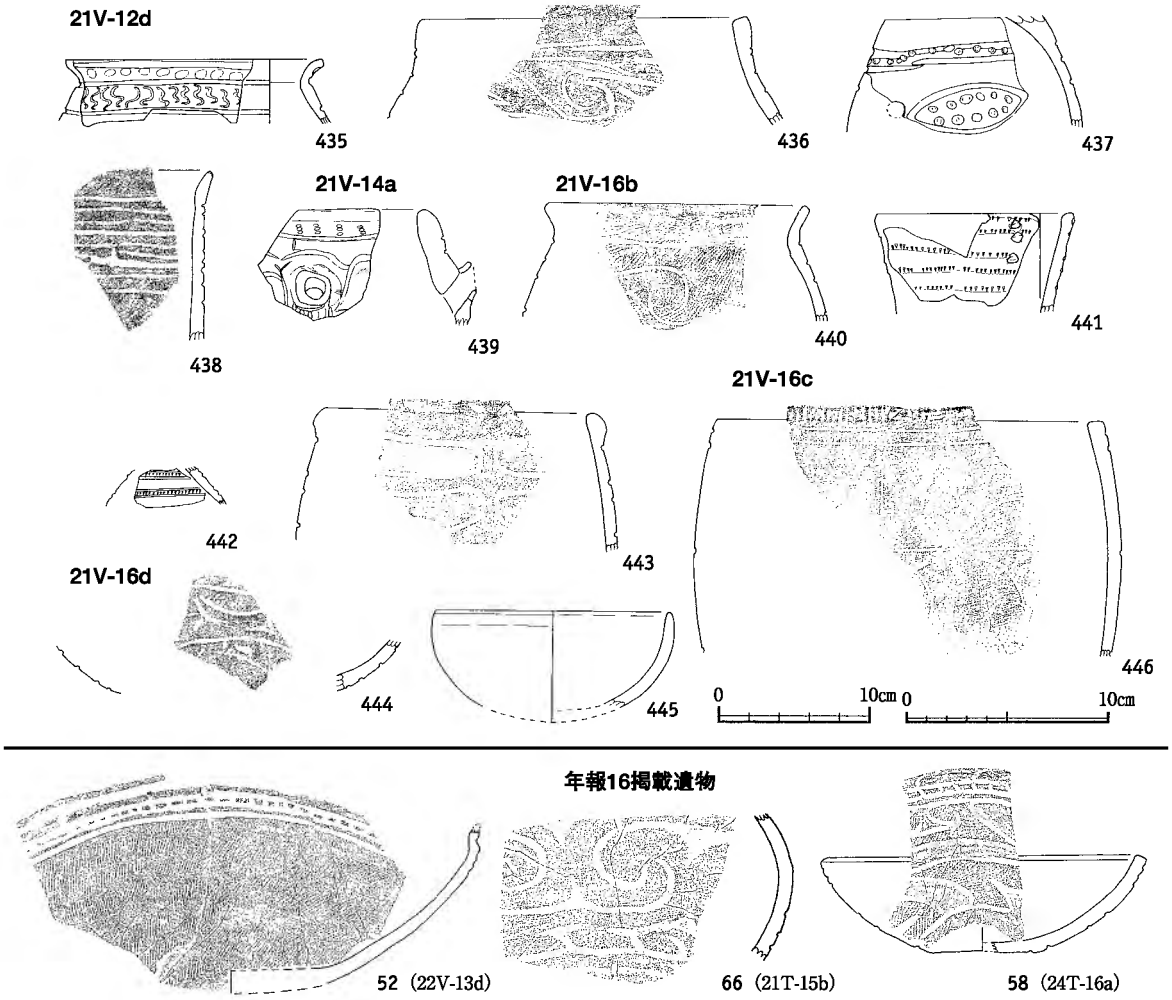
第26図　調査区出土遺物(25)（21V－4c～11c）

大半は切られている。溝は幅4.5m深さ1.0mのV字状を呈し、包含層は溝の最下層に沿って薄く堆積する砂層に形成されている。21U-8からは10～235と344・345および報告248－135の土器が出土している。特に安行3c式前葉の10と前浦1式の49・50・89等が報告248-135と供に出土していることは注目される。146と344の注口土器も出土している。22U-5からは160と295～339の土器が出土している。姥山Ⅱ式と安行3b式が主体を占めるが、306や160の前浦1式の出土も認められ、22U-5と同一ブロックと思われる。

第2地点（第34図）（報告書第243図9～第245図51）－20T-8bを中心に、10m×25mの窪地が検出され、深さは0.3mと浅い。住居（A-041）として調査を行なったが、遺構として捉えきれず除外した。覆土は2層の黒褐色砂質土より構成されており、報告第243－9～51の土器が出土している。列点を刺突する安行3c式前葉の土器（10・12・13・43・45）を主体に、姥山Ⅱ・Ⅲ式土器（9・11・31～37・41）が次ぐ。45は安行3d式の可能性がある。48は大洞C1式土器と思われる。これらの土器は窪地の底面に貼り付く状態で出土している。第2地点と



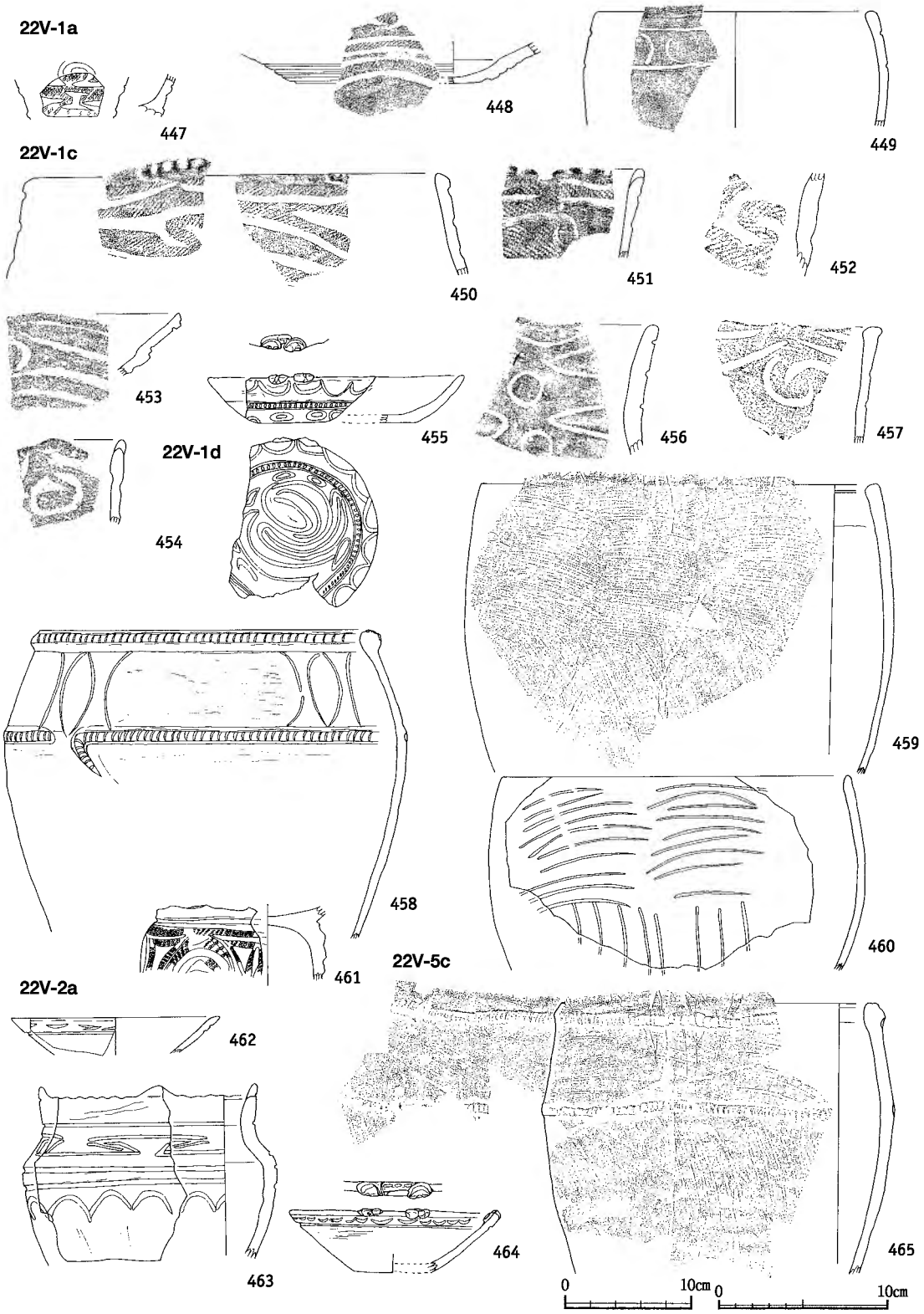
第27図　調査区出土遺物(26)（21V−12a ～12c）



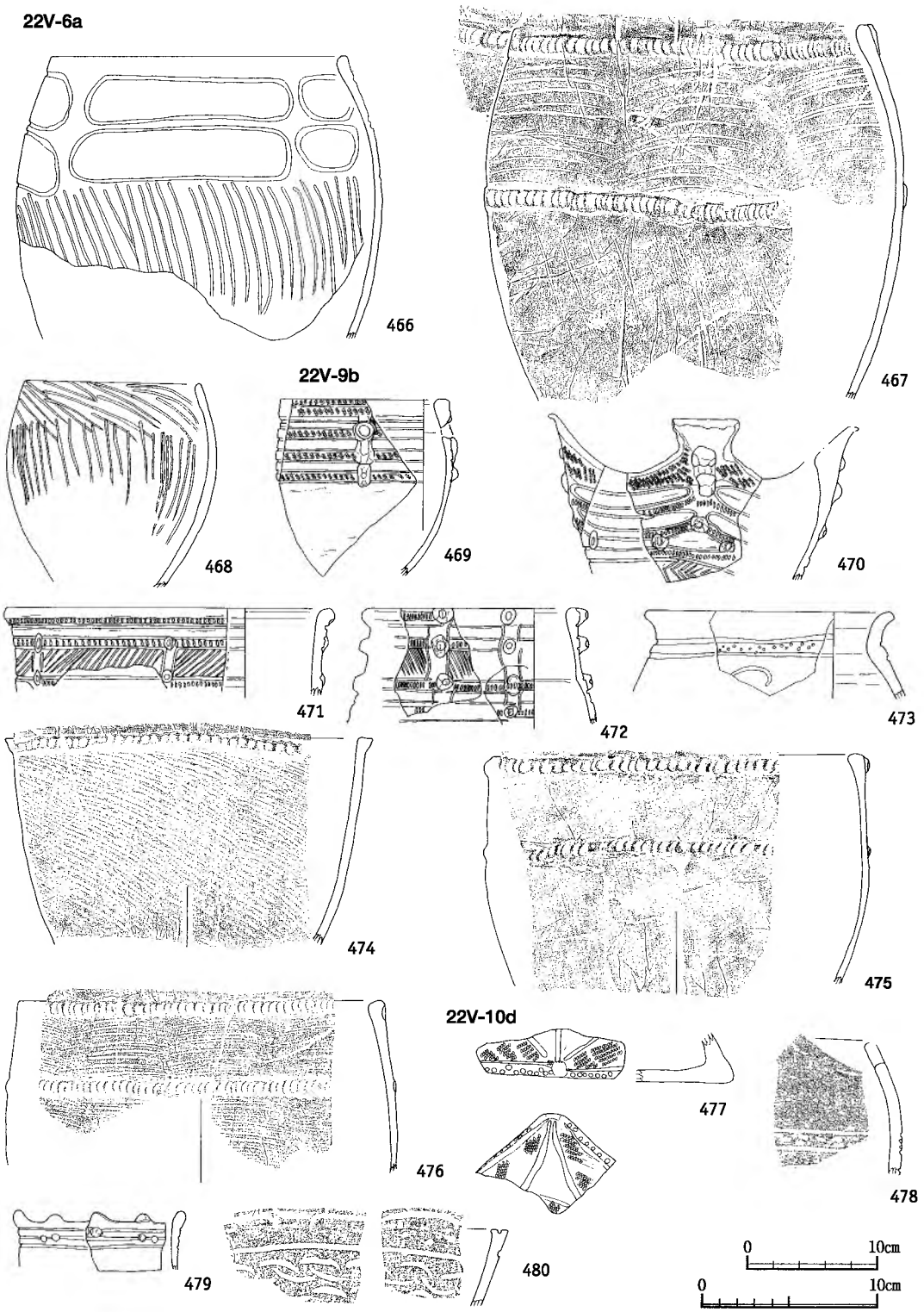
第28図　調査区出土遺物(27)（21V−12d ～16d)(上)・年報16掲載遺物(下)

した流路の末端部分に当たると思われる。１層下部から若干の土師器片が出土しており、古墳時代まで窪地となっていた可能性がある。

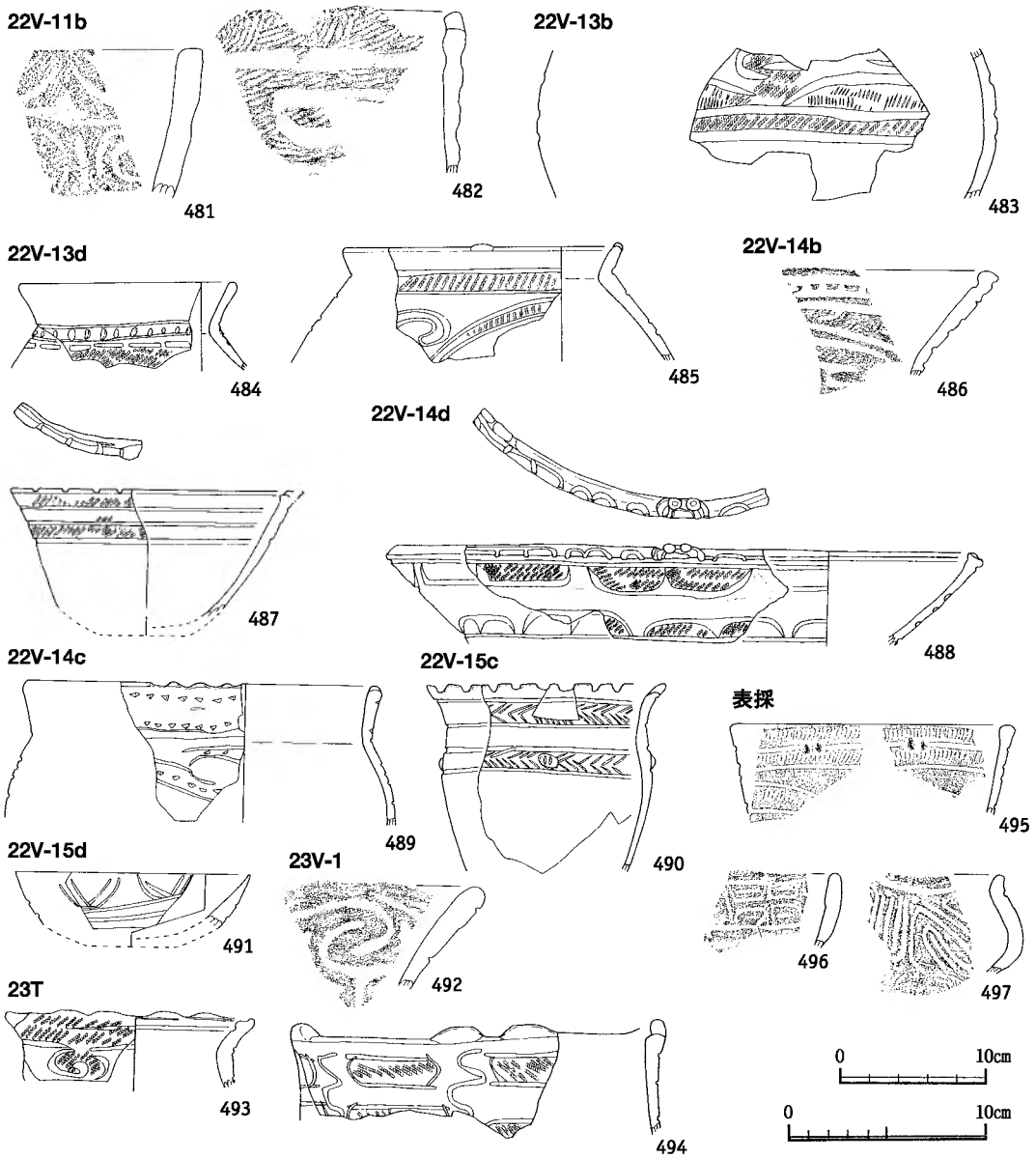
J-20（第35図）－Ⅱ層を取り除いた時点で直径10mの範囲で砂質土が検出された。この下層から報告第23－９～24と報告23－271～349の安行３a・３b式土器が、砂質土下の焼土中から検出された。炉が６ヶ所あり、最下層の炉の脇から山形土偶（報告294－52）が出土している点から、加曽利B式期～安行３b式期の６軒以上の重複と思われる。焼土は黒色土の床面上に堆積したものであり、砂質土は最終段階の住居跡内に堆積したもので、炉を中心とした直径10mの住居が想定できる。９～24は弧線文を主体とした安行３b式であるが、73は安行３c式のモチーフである。このよう砂質土はJ-54でも認められ、砂質土下から安行３b式の無文の浅鉢が出土している。炉が２ヶ所あり、壁際から堀之内式の大形土器が出土したために同期の住



第29図　調査区出土遺物(28)（22V－1ａ～5ｃ）



第30図　調査区出土遺物(29)（22V－6ａ～10d）



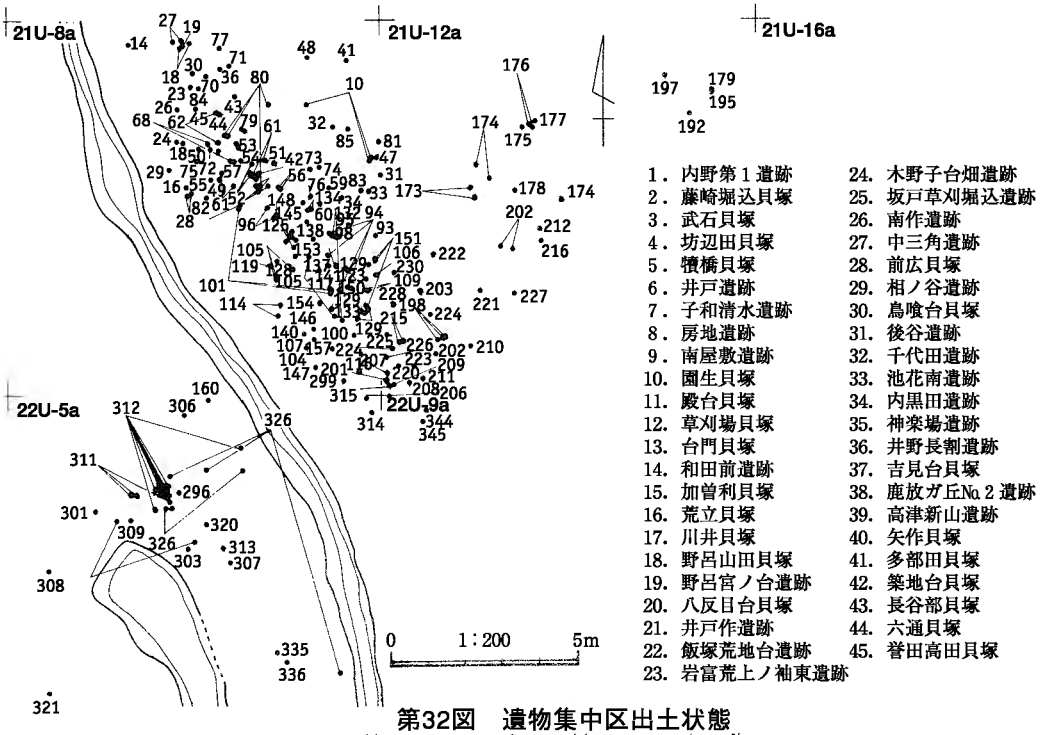
第31図　調査区出土遺物(30)（22V−11b ～15d・23Ｔ）

居と捉えたが、晩期の住居が存在した可能性もある。

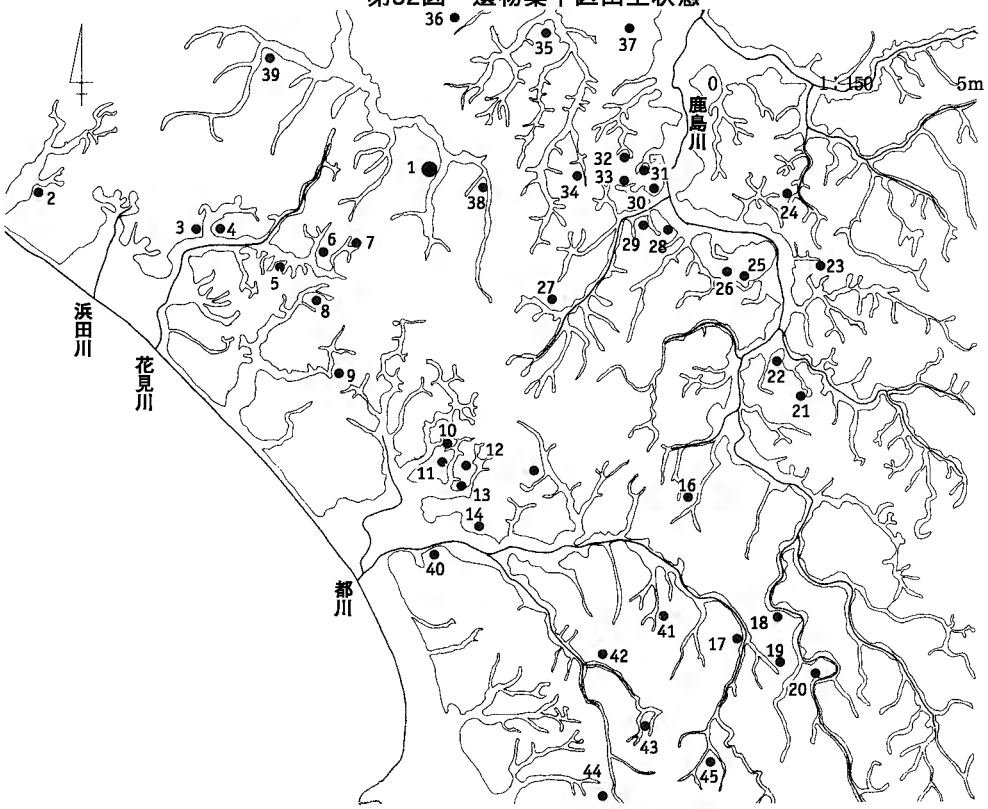
J-100（第36図）－６本の柱穴が円形に配置された掘立柱建物跡で、列点を施した弧線文の安行３c式前葉の土器が出土している。出土状態については前号で記した（文献４）。

４．土器とその他の晩期遺物の関係

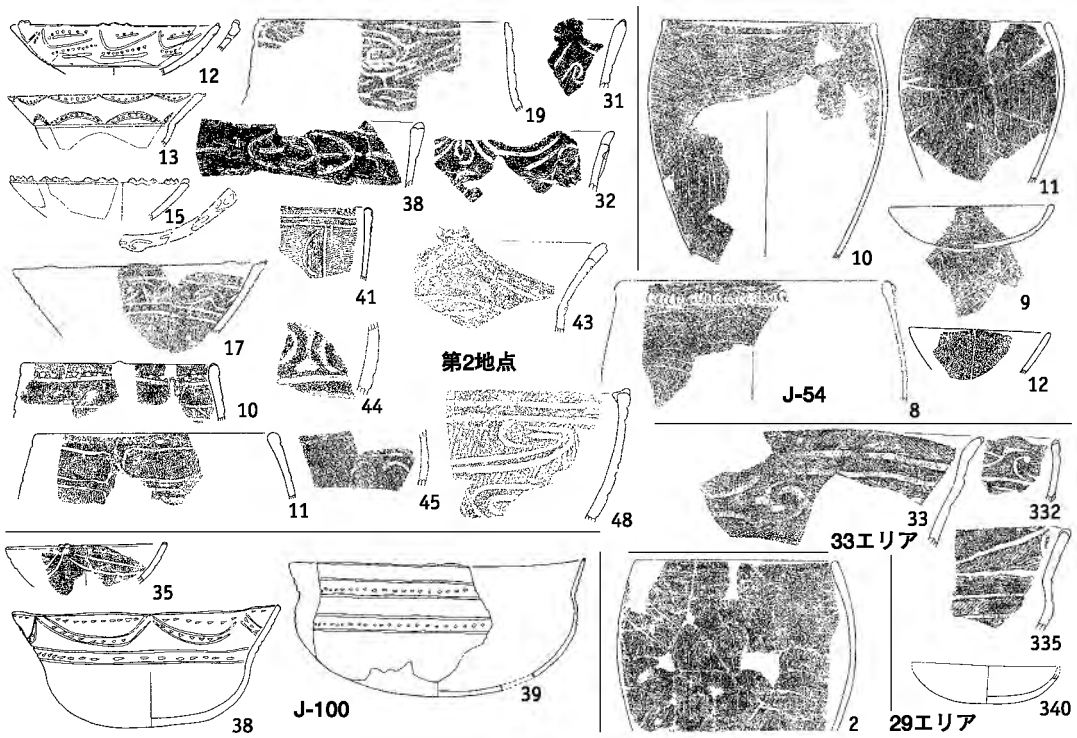
内野第１遺跡からは、土器の他に土偶・土版・石剣等の多く遺物が出土している。特にＩ字



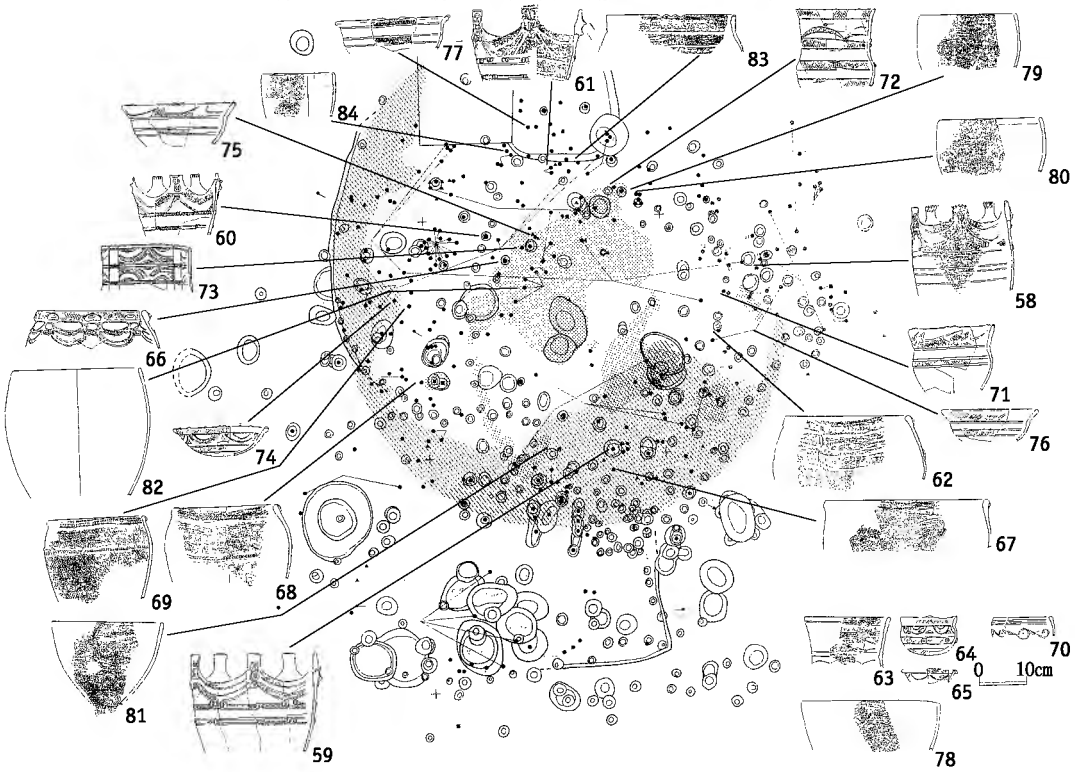
第32図　遺物集中区出土状態



第33図　内野第１遺跡周辺の縄文時代後、晩期の遺跡分布図



第34図　内野第１遺跡終焉期の遺構出土遺物



第35図　J-20号住居の晩期の遺物出土状態

文を有する土偶・土版が多く、報告第317－27の土版が前浦式の古い段階に比定される事は述べた（文献12)。Ⅰ字文を有する土偶・土版は第Ⅲ群土器の安行３c・３d式に伴う（文献13)とされ、90・232・306・第２地点の報告245－44の土器にも認められる。また報告314図の足付土器には第Ⅲ群第２類Ｇ種４の対向弧線文が施され前浦１式に、報告298－112の土偶裏面に施された雷文と刺突は第１類Ａ種３の294の土器と共通し、従来の姥山Ⅲ式と捉えられる。報告295－62の土偶裏面は対向三叉文で第２類Ａ種２、報告297－100・報告308－287は第２類Ａ種１、報告313－384は第１類Ｈ種１の土器と共通する文様を持つ。

５．内野第１遺跡における縄文時代晩期包含層の特質

近年、環状盛土遺構と関連して大型環状集落における晩期包含層の在り方が重要な問題となっている（文献14)。東京湾東岸の縄文時代晩期の包含層は、加曽利南貝塚や貝の花貝塚のように大型環状貝塚の中央窪地から発見される例が多く、中には西広貝塚のように獣骨層を伴う例や、三輪野山貝塚のように中央に大石を据え、周辺から晩期の土器が土版や石棒と供に出土している例もある（註２・文献15)。内野第１遺跡では第１地点と第２地点およびJ-54の覆土は共通し、調査時には晩期の流路と考え、第２地点はこの流路の最奥部で滞水状態にあったものと捉えた。環状集落の中央部は全くの無遺物層で、台地上に展開している古墳時代の遺物も出土していない（註３)。今回報告した晩期を包含する流路がこの中央部に繋がっていることを考えると奇異である。集落の中央部周辺の晩期の遺構は、33エリア炉４（住居？）と29エリア周辺のピット群のみであり、古墳時代以降に削平された可能性もある。集落の終焉期の遺構としては、安行３b式期のJ-20と、安行３c式期の円形の掘立建物跡J-100が考えられ、最終段階の前浦式期の遺構は明確に掴みきれていない。前浦２式期と思われる土偶や土版等の遺物の時期と若干のずれが認められる。これらの祭祀遺物を残しながら住居が存在しないことや、遺物集中地点が第１地点と第２地点の２ヶ所に限定されるのは、今後の課題となる。

６．周辺の晩期遺跡群との関係

周辺の井野長割遺跡・神楽場遺跡・千代田遺跡・中三角遺跡・犢橋貝塚等の後晩期の拠点遺跡は半径４㎞の円上に位置する。江戸時代の印旛沼掘り割り工事や陸軍演習場、戦後の開拓等で破壊された遺跡の存在も考えられるが、隣接した印旛沼南岸地域の当該期の遺跡群が1.5㎞～2.5㎞（文献16)、都川流域の遺跡群では２㎞（文献17）とされており、その関係距離は他地域と比較すると長い。当遺跡では加曽利Ｂ式期のD-369と安行２式期のJ-114からオキアサリを主体とした貝ブロックが検出されている。印旛沼に注ぐ鹿島川に立地する千代田遺跡では安行１式期の住居からオキアサリを主体とした貝ブロックが検出されている（文献18)。阿部芳郎氏は鹿島川流域の鳥越台貝塚や千代田遺跡の貝層のあり方から、内陸部では加曽利Ｂ式期と

安行１式期では鹹水産貝類の入手に違いがあり、加曽利Ｂ式期では手繰川方面の搬入路が想定できるとしている（文献19)。オキアサリは園生貝塚等が位置する小中台川流域貝塚の主体となっており、ハマグリを主体とする葭川流域と大きく異なる（文献20）とされている。当遺跡のオキアサリや鯨骨は、稲毛浜→（小中台川）→犢橋貝塚→井戸遺跡→内野第１遺跡のルートで搬入され、当遺跡が千代田遺跡の搬入路の中継地点であった可能性がある（註４)。

内野第１遺跡の集落の終焉は晩期中葉の前浦式の段階である。次の時期の遺跡としては、東2.5㎞の勝田川流域に鹿放ヶ丘No.２遺跡（大洞Ａ式期）（文献21)、分水嶺を越えた西３㎞に子和清水遺跡（前浦～弥生中期）（文献22)、西４㎞に房地遺跡（千網式～弥生中期）（文献23）が存在する。内野第１遺跡の集落終焉後はそれらの遺跡に拡散したと思われる。

おわりに

ようやく内野第１遺跡の晩期の資料を提示することができた。内野第１遺跡の調査終了から10年近く経過しこの間、阿部芳郎氏からは大形住居とされるJ-90について上屋が建たないとされ、現場を見られない人にとっては報告書が全てだとの指摘を受けた。また、鈴木正博氏の埼玉県馬場小室山遺跡に対する論考（文献24）に接し、私自身の遺跡に対する甘さを痛感している。今回の資料は、2004年に加曽利貝塚博物館の郷土史講座で「内野第１遺跡の再構築」と題して行った講演の基礎資料である。近年の晩期中葉の研究は、大宮台地を軸とした安行３ａ～３ｄ式が中心となっており、前浦式についての検討が立ち遅れている現状がある。前浦１式と前浦直前形式の関係や、近年提唱されている富士見台式の問題（文献25）等の検討を行なわずしての資料提示となったが、今回の提示資料は極めて一括性の高い資料であり、早急な公表が必要と考えた結果である。今回の資料をはじめとして、一連の内野第１遺跡出土資料の再提示は下記の方々の努力によるものである。記して感謝申しあげる。

青柳すみ江・稲村三枝子・内野弘子・梅田茂子・加藤木純子・古角昭子・小山由美
斎藤道子・佐藤真利子・志村真咲・鈴木洋子・清藤扶美子・高橋恵子・北原雅子
中島志保・西郡眞美・新田浩美・原　啓子・引地幸恵・難波美由紀・山形道子
屋代　昭・山口志津枝・横山　恵・米倉初代・渡邊穂波・和田史子

（財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター）

註

１．土偶・土版・耳飾・有孔土製円盤等は報告書記載と、年報16で追加報告したもので実数に近い。石棒・石剣については紀要32号で全出土資料の計測値を掲載した。他に打製石斧約467点、磨製石斧約200点については計測終了次第公表したい。異形台付土器・釣手土器等は層一括の中にも含まれている可能性がある。

2．三輪野山貝塚については流山市教育委員会小川勝和氏からご教示を受け、多くの資料を頂いた。記して感謝申し上げる。

3．報告書では中央窪地のセクション（第５図12・13）もおいて、Ⅲ～Ⅴ層が縄文時代包含層としてスクリーントーンで表示してあるが、遺跡全体の統一した土層注記作成による誤記である。

4．阿部芳郎氏の他に、堀越正行氏は八木原貝塚のオキアサリの搬入経路として、都川下流域→都川・鹿島川中流域、野呂山田貝塚・荒立貝塚→前広貝塚→八木原貝塚のルートを想定している（文献18)。また、当遺跡のオキアサリに注目した樋泉岳二氏は、谷筋の他に分水嶺を越えた台地上のルートも考慮すべきとしている（文献26)。

文献

1．㈶千葉市文化財調査協会 2001 『千葉市内野第１遺跡発掘調査報告書』

2．田中英世 2004・2005 「千葉市内野第１遺跡出土の縄文時代資料補遺(1)・(2)」『埋蔵文化財調査センター年報』16・17 ㈶千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター

3．田中英世 2006 「千葉市内野第１遺跡出土の埋設土器と縄文時代後期前半の土器群」『埋蔵文化財調査センター年報』18 ㈶千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター（予定）

4．田中英世 2005 「千葉市内野第１遺跡出土の石棒・石剣」『貝塚博物館紀要』第32号 加曽利貝塚博物館

5．鷹野光行 1978 「前浦式土器の研究」『考古学雑誌』第64巻第３号
鷹野光行 1988 「安行３b式をめぐって」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第41巻
鷹野光行 1990 「安行３c式の３細分」『先史考古学論集』第３号

6．新屋雅明 1992 「大宮台地出土土器を中心とした安行式土器の編年」『シンポジュウム 縄文時代後・晩期安行文化』埼玉考古学会

7．鷹野光行 1977 「晩期の土器」『西広貝塚』国分寺台遺跡調査会

8．猪瀬美奈子 2002 「北関東における晩期中葉の土器群の様相」『栃木県考古学会誌』第23集

9．菅谷通保 2004 「南関東地域型式群に見る「安行式の終焉」」『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討－記録集－』

10．田中英世 2003 「六通貝塚」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－平成14年度－』千葉市教育委員会

11．古谷 渉 2003 「内野第１遺跡出土の紐線文土器群」『埋蔵文化財調査センター年報』15 ㈶千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
古谷 渉 2004 「安行式粗製土器編年試論Ⅱ」『縄文時代』第16号 縄文時代文化研究会

12．田中英世 2004 「千葉市内出土の人面付土版」『貝塚博物館紀要』第31号 加曽利貝塚博物館

13．鷹野光行 1977 「関東地方の土版の分類について」『古代文化』第29巻第10号
堀越正行 1993 「Ｉ字文土偶、その系譜と分布」『埼玉考古』第30号

14．沖松信隆 2005 「縄文時代後・晩期集落における中央窪地の形成について」『研究紀要』第26号 ㈶千葉県文化財センター

15．小川勝和・小栗信一郎 2004 「三和野山貝塚について」『シンポジュウム『井野長割遺跡を考え

る－環状盛土をめぐって－』佐倉市教育委員会
16. 高橋誠・林田利之・小林園子 2001 「縄文集落の領域と「縄文流通網」の継承」『研究紀要』２ ㈶印旛郡市文化財センター
17. 堀越正行 1972 「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』第31号
18. 堀越正行 1983 「谷奥貝塚の意味するもの」『史館』第15号
19. 阿部芳郎 2000 「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造」『駿台史学』第109号
阿部芳郎 2001 「四街道市八木原貝塚の基礎的研究～内陸における縄文後期主鹹貝塚の形成と意義～」『四街道市の文化財』第25号　四街道市教育委員会
20. 岡田茂弘・宇田川浩一 2000 「園生貝塚」『千葉県の歴史－資料編　考古1　旧石器・縄文時代－』千葉県
21. 四街道市教育委員会 2000 『四街道市埋蔵文化財分布地図』四街道市教育委員会
22. 田中英世 1987 「子和清水遺跡」『子和清水・房地・一枚田』㈶千葉市文化財調査協会
23. 湖口淳一 1987 「房地遺跡」『子和清水・房地・一枚田』㈶千葉市文化財調査協会
24. 鈴木正博 2005 「「谷底包含層」と「窪地包含層」から検証する馬場小室山遺跡の「環状土塚－環状盛土遺構」研究における新たなる視座と先史考古学の原則－」『茨城県考古学協会誌』第17号
鈴木正博 2005 「高井東遺跡から馬場小室山遺跡へ－「焼獣骨角小片群」、「住居址空間多目的利用そして所謂「環状盛土遺構」へ」－」『埼玉考古』第40号
鈴木正博 2005 「馬場小室山遺跡における「環状土塚」の構成と形成プロセス」『姿良岐考古』第27号
25. 宮原俊一 1998 「前浦式成立に関する一考察－前浦式直前形式の展開－」『東海大学校地内調査団報告』８　東海大学校地内遺跡調査委員会
26. 樋泉岳二 2003 「貝塚からみた生産活動と縄文社会」『縄文社会を探る』学生社

《追記》『千葉県の歴史　資料編４－遺跡・遺構・遺物－』の「抜歯」において（註１）、春成秀爾氏により当遺跡の人骨の時期について疑義が出され、抜歯の形態から縄文時代後期後半～晩期に属するとの指摘がなされている。同様の指摘は、人骨調査の際に、西本豊広・松村博文両氏からも受けた。黒色土内の掘り込みが未確認のための誤認と思われる。各氏に対して深くお詫び申し上げる。これについては、次回の後期後半の遺物提示後に検討を加えたい。

註１　春成秀爾 2004 「抜歯」『千葉県の歴史　資料編4－遺跡・遺構・遺物－』 千葉県